士の象徴を奪われるという耐え難い屈辱に生活苦が重なった集団自殺的な悲愴さを帯びた反乱であった。これが明治十年の、本格的内乱ともいうべき西南戦争へと収斂していく。その鎮圧をもって、一応の終息をみたのだが、政府の、このときの戦費調達のための紙幣乱発が深刻なインフレーションを引き起こした。これを収拾しようとして取った松方正義の極端なデフレ策によって、不況は避けられない必然として滑走し、反乱に加担することなく自立を目指していた士族事業者たちさえ、歴史の断層に呑み込まれていったのである。あまつさえ、反乱に与した者たちはどうなったか。囚人として北の果てに送られ、明治政府及び政府と結託したいわゆる政商の支配下にあるインフラ事業への、無償の労力提供者として、その使役に甘んじるほかなかった。

薩・長・土連合が幕府を倒したことをもって明治維新とするよう、歴史の教科書は教えているが、筆者は「真の革命」は廃藩置県による武士階級の廃絶にこそあったと思っている。倒幕などは封建諸侯間の権力闘争にすぎなかったといえないこともないが、底辺の個々の動きとしては下級武士の台頭があり、頂上では藩候の権威抹殺という大転換があったのである。武器調達のために生じた諸大名の外国公館への多額の借金を新政府が肩代わりする代償でもあった。その上で、経済に疎い武人集団を近代ブルジョワジーに生まれ変わらせようとする大胆な計画が実行された。それが士族授産であった。たしかに、武家の商法と揶揄されるように、士族の多くは潔癖症で、金融業者や商人のしたたかさに歯がたたなかった。

封建制度から資本主義へ移行する過程で生じた大混乱の荒波に、旧階級が呑み込まれたと、常套的に総括してしまえばそれまでであるが、武士に叩き込まれていた礼節の思想が、儲け第一とする拝金主義に敗れたとする主張には、敗者への同情が色濃く滲んでいる。勝者はこれを、頑な忠君愛国に対する近代合理主義の勝利と、看板を書き換えるわけだが、そうしたところで真実はゆるがない。問題はこの単細胞的二分法だ。その図式にとらわれる限り、滅びゆく勢力と勃興する勢力のいずれの側にも、高邁な道徳観への誇り、日本人固有の「節操」という共通意識、それらに反することへの「恥」という共通概念が、しぶとく根を張っていたことを見逃してしまうからである。

官軍と彰義隊が激突した上野戦争の折、福澤諭吉とその門下生は敢えてこれを対岸の火のごとく自己から切り離し、普段どおり、講義の場にあったという。その折の講義内容はウィランドの「経済学原論」(The Elements of Political Economy, 1866) であったと伝えられている。

諭吉・桃介の成功を妬む人々は、前述の二分法を悪用し、彼らの合理思想を歪曲して、拝金主義のレッテルを貼って溜飲をさげたものである。他方、桃介を支持する人々は概して理性の勝った人たちであったから、桃介が情実を切って捨てるのを小気味よく感じていたふしすらある。しかし、桃介が厳しい態度で臨んだのは無能な経営陣に対してであって、愚直に分を守って勤勉に働く人たちに対しては、終始、思いや



りをもって接しており、専門性に抜きん出た職人などには高い評価を与え、厚遇するのが常であった。彼の決断はいつも理念と理論に裏付けられており、力ある者にありがちな気まぐれや横暴に基づいた命令を発することは一切なく、必ず筋が通っていたから、最初は反対だった者も、結局は説き伏せられることになった。武力によらず、金力によらず、地位に付随する権力によらず、情実に流されず、ひたすら理をもって人を従わせる新しい時代の新しいタイプの指導者、それが桃介であった。

明治期の優れた人々が採用した近代合理主義が現代のそれと違うのは、国家大事で、国益を第一とする原理原則が根底にあって、弱者救済という凛とした思想的骨格をもった指導者が実業界をも牽引していた点であろう。一八五九年の日米修好通商条約締結のための使節団を護衛する目的で、太平洋を渡った咸臨丸に、艦長木村摂津守の従者として乗り込んだ二人の男、勝海舟と福澤諭吉が持ち帰った、それぞれ分野を異にしつつも共通する国家戦略様のものが、絶対的なバックボーンとして、議論の余地なく共有されていたことに羨望を覚える。第二次世界大戦後の日本人が、かつてその精神を構成していた愛国的要素を、完璧に否定され、かつ国家への帰属意識を悪しき国粋主義と同一視して抹殺されたことについて、デラシネともいうべき浮遊性にさらされていることと、なんと鮮やかな対比をなしていることか。

近代化の始点において、帳に包まれ、まったく見えなかった西欧について知るたったひとつの方法が、言語の壁を打ち砕いて、文明のエキスとして結晶した書物を渉猟することにあったとすれば、その強力なハンマーを提供したのが福澤諭吉であった。勝海舟が過去を清算し、福澤諭吉が未来を担ったというべきだろうか。諭吉に、その才を買われて娘婿となった桃介は、より純粋な、透徹した合理主義で物事を観照し、常に最短の、しかし遠い将来のあるべき姿に直結する長期展望を見据えた上で、直面する課題についての解決策を瞬時に編み出すことのできる異端の天才児であった。桃介の才を理解できない人々、桃介に一刀両断されて怨嗟の感情にとらわれた人々が桃介を誹謗中傷する目的で用いたのが「拝金主義」という用語であった。貧しい出自ゆえに、子どもの頃、一億儲けるぞと豪語したことなどがよく引き合いに出されるが、巨大なリスクを負った本邦初のダム建設などに、勘定高い拝金主義者が手を出すことなど決してあり得ない。あるべき何かを実現するために資金を必要とするスタンスと、蓄財を第一義的な優先目的として極力リスクを回避し、社会に有益な資金提供を拒むような根っからの拝金主義とは、似て非なるというべきであろう。その種の誹謗に反論するため、そして桃介登場の真の意味を問うために、ここで士族事業としての電気産業を、その背景と共に、一度は概観しておくのも無益ではないだろう。

明治十年の西南戦争の戦費調達のために政府は不換紙幣を増発するしか方法がなかった。当然深刻なインフレーションを引き起こした。大蔵卿大隈重信は、このインフレーションの原因を紙幣流通量に関連させてひもとき、根底に銀保有量

不足による信用不安があると指摘した。大隈は本位貨幣である銀貨を増やして不換紙幣を回収すべきだと考え、しかも積極財政を維持するためには外債を発行し、海外の銀を借款するのが肝要と建言した。

思えば、日本産の良質の銀が大量に海外に流出したのは、日本人どうしの内乱流血のための銃や大砲のためではなかっただろうか。ある時期、世界の銀生産の三分の一を日本が担っていたといわれ、世界の銀流通量の七割が日本産だったとさえ伝えられるが、最大の銀鉱脈を持っていた石見銀山は既に掘りつくされ、明治元年に民間に払い下げられたものの、明治五年の地震で休山となり、銅採掘へと舵を転じつつあった。金の不足はいうに及ばずであった。以下の点を誰も指摘しないことに不満を覚えるのだが、開国と内戦は、黄金の国ジパングの伝説をもつ日本から、徹底的に金・銀を吸い上げる、英仏の然るべき筋の謀略ではなかったか。良質の金と銀を武器即ち鉄屑と交換するシステムではなかったか。

大隈重信が大蔵卿であった頃、次官の大蔵大輔であった松方正義は、インフレーションの根本原因は、単純に、明治維新以来の政府財政の乱脈膨張にあるのみとして、長年財政策を担ってきた大隈を鋭く批判した。松方は当時の不換紙幣を兌換紙幣に置き換える手順を示唆し、緊縮財政を主張した。これに大隈は激怒。両者の対立は修復不可能と判断した伊藤博文が松方を内務卿に推挙するという離れ技で財政部門から遠ざけた。政府はこの時点では積極財政を必要としていたからだと思われる。ところが、いわゆる「明治十四年の政変」(一八八一年)で大隈が政府から追放されるや、松方が大蔵卿に任命され、大鉈がふるわれることになった。

明治六年から七年にかけて、まず征韓論を掲げた西郷が下野し、板垣、後藤、江藤らがこれに続く形となったが、明治十四年にまたしても斯様に大掛かりな政変劇が起きたのである。自由民権運動がピークに達し、憲法制定の要求が高まると同時に、その内容についての論議イコール国体論争であったから、国会開設決定前後の闘争は熾烈を極めた。政府内に徐々にネットワークを築きつつあった反薩長閥ともいうべき大隈重信と諭吉を首魁とするグループがイギリス型の議院内閣制の草案を準備しようとしていた矢先、大権を君主に帰属させる道を採用したかった岩倉具視らは、井上毅のプロイセン型に傾斜していった。この明治十四年の政変によって、大隈のみならず、諭吉の息のかかった官僚のことごとくが一斉に、政府関係の職を退くこととなった。

明治十五年に伊藤はプロイセン型憲法調査のためドイツにわたり、翌十六年の岩倉の死後に帰国しているが、伊藤の権力が突出して絶対化したのがこの頃からである。明治天皇と伊藤との異常なほどの親密さこそ、歴史の謎である。財政策では、伊藤は松方よりも大隈を必要としていたふしもあるが、天皇の大権を守るためには、それすらもあっさり放棄したわけである。維新前から、天皇に関する微々たる疑念に対しても、刀にかけて、殺傷をも辞さぬという強い態度を貫いてきた伊藤も伊藤なら、伊藤の私生活の細部に対してまで、懇ろな言葉がけをしてきた明治天皇の気遣いも尋常ではない。女と見れば片端からひと息に掃きとるほどに手が早いために箒と綽名されるほど伊藤の漁色は激しかったというが、そんな伊藤に天皇は「ほどほどにしてはどうか」と意見したところ、「わたしは他の者と違って妾を持つような不届きをしていない」と、堂々と弁明したという様子が笑い話として伝えられている。二人のこれほどの親密な関係が、当事の国家権力の主軸をなしていたわけだが、畏れ多くも天皇陛下と、元は下級武士未満の走り使いだった伊藤との、まるで竹馬の友でもあるかのごとき信頼関係はいったい、いつどこで築かれたのだろうと、不可解至極だ。なにしろ天皇親政の時代である。何事も最後には陛下の鶴のひと声で決まっていくのだが、そのひと声が伊藤の意見と異なることはあり得なかった。すべての結論は伊藤にあり。そのような時代だったのだ。

ともあれ、政変後に財務の長となった松方は早速、不換紙幣を兌換紙幣に置き換える紙幣整理事業に着手した。回収した不換紙幣を焼却し一八八二年(明治十五年)に日本銀行条例を公布して日本銀行を設立して、通貨信用体系を再構築した。国内でまだしも幾分の余裕があると見られていた銀に基づく銀本位制を目標としつつ緊縮財政を厳しく断行した。兌換紙幣発行のための銀貨を準備しようとして、政商への官営工場の払い下げを加速したりもした。煙草税や酒造税などを新設して歳入増加をはかる一方、軍事費以外の政府予算を大幅に削減した。その結果、明治十四年(一八八一年)の発行紙幣に対する銀準備率がわずか八%だったのに対し、明治十八年(一八八五年)には三七%に達したのである。こうして日本銀行初の兌換紙幣(銀兌換紙幣)が発券可能となり、銀本位制が確立した。金本位制への移行はずっと後の明治三〇年(一八八七年)となる。日清戦争の賠償金による金準備高によって、漸く可能となったのである。しかし、そこに到るまでに、松方デフレにより、米・繭などの農産物が下落したことで、農民の生活基盤は絶望的なまでに破壊された。凶作と秩父事件という農民の蜂起もあった。いうなれば農村解体の危機であった。窮乏した農民は農地を手放し、小作に転落、あるいは都市に出て奉公人としての職を求めた。こうして広範な土地が地主あるいは高利貸しのもとに集中し、大地主・分限者が形成される一方、官営工場の払い下げにより、政商が財閥へと成長する足がかりが築かれつつあった。そして他方では、逼迫した旧士族と農民の幼い娘たちが、前借金と引き換えに、製糸工場や花街に大量に流れていくことになった。

暗殺者がいたる所で跋扈するきな臭い時代であった。木戸孝允や岩倉具視亡き後、一番の要人として狙われる存在といえば伊藤博文ではなかったか。表舞台が天皇を上座に据えての御前会議であるなら、上程案を事前に謀議する場所はというと、それぞれの私邸が第一ということになる。当然、官庁への行き帰りの道中が最も危険で、いつ暴漢に襲われるかわからない。もちろん自宅も安全ではない。暗殺者は平気で踏み込んでくる。自宅に書生を置いたのも用心のためであった。自宅で枕を高くして寝られないとしたら、緊張を解くのはど

こか。それが花街の、それも特に葭町であり、そこには気の置けない料亭の女将、長谷川於鈴であるとか、昔馴染みでいまは芸者置屋の主となっている濱田可免であるとか、その界隈で育てられている年端のいかない雛妓の少女たちであるとか、襟替え直後のみずみずしい芸者たち、あるいは世慣れて芸達者な年増などがいる。いかめしい元勲が相好を崩す光景が目に浮かぶようである。その中で抜群の優等生だった美少女、それが可免の秘蔵っ子の「小奴(本名 さだ)」、後の貞奴だったわけである。

現在も貞奴ご遺族の川上家に額装されて大切に保管されている一枚の文書がある。「とらない」と記された証文がそれである。そこには、伊藤博文、井上馨、藤田伝三郎、内海忠克の四名と立会人の長谷川於鈴が署名しているが、互いに抜け駆けをして小奴に手をつけることは慎もうという誓約を記したものである。それでも主たる後援者は伊藤と、暗黙の了解がふくまれていたのだろうか。後に三年と期限を切って、雛妓の「小奴」改め芸者「奴」の費用一切の面倒を見たのが大日本帝国を切り盛りする初代宰相だったわけである。

明治十四年の政変の後遺症がまだ癒えぬ明治十六年に岩倉が病死し、憲法調査にドイツに行っていた伊藤が急ぎ帰国した直後、さだは小奴としてお座敷デビューした。前後して桃介が慶応義塾に入ったという計算になるだろうか。桃介の進学については、西洋文明にも通じた榎本なる人物が「桃介ほどの人を田舎に置いておくのは惜しい、岩崎の家でなんとかならないか、借金をしてでも」といって勧めたと、これは桃介自身の述懐である。

この桃介と小奴とがほどなく恋に落ちた。乗馬を習っていたお転婆小奴が遠乗りして成田山に参詣した帰途、野犬に襲われて落馬しそうなところを桃介が助けたということに一応はなっている。偶然にしては出来すぎた話であり、これには様々な想像の余地がある。貞奴が刻ませた貞照寺胴羽目の木版では、桃介ではなく、お不動様が助けたことになっているし、成田山というのはあまりにも遠すぎる。

それらの真偽はともかくとして、美男美女が知り合って、ロマンスの花が咲き、街雀の盛んな噂の的となった。そのことを、伊藤博文も福澤諭吉も知らないはずはなかったし、もっといえば、桃介自身が、小奴の背後にいる伊藤がいまや、自分の師である福澤諭吉の宿敵であることを認識していないはずはなかった。穿った見方をすれば、慶応義塾関係者が一丸となって、伊藤に意趣返しを企んだとしても、驚くにあたらないような情勢であった。といってもいたいけな少女を傷つける目論見など人道主義集団にあり得るはずがなかったし、あり得たとするならば、権力者の毒牙から美少女を守ろうという侠気くらいのものであっただろう。いずれにしても、そこに、二人にとって初恋といえるものが芽生えたことが後に、日本の近代化に大きく貢献することになるのである。

伝え聞くところによると、慶應時代の桃介はひときわ智謀



に長けたガキ大将で、しんみりと恋に悩む文学青年のような趣は見せていない。それでも妹の翠子女史の証言によると、桃介は当初、文学者か新聞記者になりたいと思っていたそうである。実際、桃介のきめこまやかさと文章力は相当なもので、実家に、福澤先生に川越の芋を送ってほしいと依頼した折、これこれしかじかの文面の手紙を添えるようにと、お手本までしたためている。その文面から読み取られるであろう父、紀一の性格は謙虚で教養深く、人品骨柄卑しからぬ存在と、諭吉に信じられること間違いなしで、このように父親のゴーストライターを引き受けるほど、情緒豊かで格調高い文章を書く力を備えていたことに吃驚する。

きかん気の小奴はこの恋にのめりこんだのか、それとも冷静に桃介の器量を測っていたのか、あるいは大人びた諦観で自制の他なかったのか、実際のところは一切、不明である。桃介のほうにさほどの打撃は感じられない。桃介を次女の婿に迎えようとする諭吉の、桃介の実家に対する懇ろな対応と、アメリカ留学という破天荒な夢がかなう喜びに、彼の心はただただときめいていたということだろうか。それとも・・・。

男の野望と恋の対立のモチーフはよくある設定であり、男の本性を疑う女たちの嘆きが悲劇的に描かれるのが常である。しかし、このときの二人の本心は謎に包まれている。この部分を穿鑿するとすれば、ずっと後に再会したとき、何が起こったか、どのような信頼関係で結ばれていったか、そこから帰納して想像するしかない。それほど二人は誰にも本当の胸の内を打ち明けていないのだ。

桃介が遠慮なく本音を吐露し、愁嘆を見せたのは、アメリカ留学中に両親の死を知ったときだ。いずれ故郷に錦を飾り、親を喜ばせたいと懸命に励んできたものを、これではいったいなんのためにと悲嘆にくれ、飲み明かし、福澤家から支給されていた月額費用の何倍も使い込んでしまい、そのため諭吉の実子、次男の捨次郎が桃介の怪しからぬ行状を諭吉に書き送ろうとしたのを、「まあ、待て、本人から事情を聞いてみるから」と止めたのが岩崎清七であった。その親切心のため、岩崎はイェール大学の教授たちと水力発電の実地検分に出かける予定を不意にしてしまったと、「福澤桃介翁傳」には綴られている。

明治二二年十一月にアメリカ留学から帰国した岩崎桃介は翌十二月初旬にあわただしく結婚し、同二三日に分家の手続きをし、福澤桃介となって北海道炭礦鉄道會社(略:北炭)に就職した。この北海道炭礦鉄道を創業したのは堀基という典型的な薩摩閥の人で、この明治二二年十一月に営業免許を得て十二月に事業をスタートしているのだが、日本初の炭鉱である幌内炭鉱と官営幌内鉄道の払い下げを得て、これから事業を拡張しようというタイミングであった。

ところで明治二二年十二月といえば、名古屋電燈がその十五日に電力供給を始めている。奇しくも桃介の再出発と同時期というのがいかにも興をそそる。

北炭は、集治監の囚人を自由に使役する権利をもつなど、官の絶対的ともいうべき保護下にあり、後に桃介自らが作った丸三商会が純粋な民営であったことと好対照をなしている。二九年の商法施行で北海道炭礦鉄道株式会社と改名した北炭は、明治三十年の鉄道資本利子補給命令の廃止で初めて政府との関係を離れ、完全な自主経営態勢となった。明治三九年の鉄道国有法で鉄道二〇〇キロを国に売り渡したが、北海道炭礦汽船株式会社と名前を変えて存続した。日清・日露戦争による石炭市場の拡大や、三井の中上彦次郎による株の買い占めなどの曲折を経て、三井コンツェルンの一角を形成することになるが、北海道炭礦汽船株式会社は後に慶応義塾の理工学部の土地を寄付したことで知られており、慶応とは一貫して強い絆で結ばれてきた。

福澤諭吉の娘婿であったが故に、桃介の初任給は一〇〇円という目を剥くほどの高額であったが、やがて八〇円に減額されている。会社が業績不振となり、社長が高島易断で著名な高島嘉右衛門に交代したのはよいが、高島社長は占いによって会社の方針を決定したり、従業員を馘にしたりした。そのようにして免職された者の中には後に社長となる宇野鶴太や桃介も混ざっていたという。これには政府筋が直接介入している。福沢諭吉と松方蔵相の意見で高島嘉右衛門を平取締役に降格し、井上角五郎を専務理事として社長の実権をゆだねた。井上は諭吉の弟子で、北海道炭鉱鉄道を基盤に日本製鋼所を創設した男である。井上は七〇人余りをリストラすると同時に、直ちに桃介・宇野らを復職させ、汽船をチャーターして石炭を直接回漕、販売すべく事業を拡張した。桃介が東京支店でその手腕を発揮するようになったのはこの井上の下で、余剰石炭を東京や関西方面に売り捌く責任者になった頃からである。愛知石炭商会の下出民義と出逢ったのもこの頃であった。下出民義は後に名古屋電燈の副社長となるのだが、桃介が名古屋電燈入りした背景として、この下出の存在が強く影響していた。

この時代の桃介は結核で倒れるまで、早朝から深夜まで馬車馬のごとく働いていた。特に夜は、一八八〇年(明治十三年)に福澤諭吉を主宰者として結成されていた日本初の実業家社交クラブである交詢社に入り浸り、人脈づくりに余念がなかった。

政界と経済界の狭間で学問という領域に踏みとどまりつつも、資本主義の仕組みを活用する術を熟知し、近代経済人を育成しながら、日本に資本主義を根づかせ促進する立場にあった福澤諭吉の位置の特異性がいよいよ浮き彫りになってくる。そんな大柄な諭吉の投げかける影を踏み超える形で桃介が登場してくる。

ところで、桃介を貧農出身とするのは間違いである。親戚・縁者には分限者も少なくなかった上、前述したように、父親の紀一は名主の家の出であり、一八七八年(明治十一年)に川越に設立された第八十五国立銀行の書記として採用されていることから考えても、当時の農村の状況を慮るに、インテリ



層に属していたことは間違いないし、桃介の血筋もやはりサラブレッドといえなくはない。第一、諭吉は愛娘の婿としてふさわしい条件のひとつに、「血統のよいこと」を上げていたから、桃介の血筋に疑義があれば、婿とすることはなかったはずである。その頃の慶応義塾では士族出身者と地方の大地主や政商の息子などが入り混じり、共に机を並べていたわけであるから、その中にあって、桃介の貧窮ぶりが際立ったということはあり得るが、それでも、古着とはいえ、初めて洋服を着た学生が桃介であったという説もあり、一家が零落して川越に移り住んだばかりの一時期はともかく、明治初期の世の中全体を見わたせば、中流を下回っていたわけでもなかろうにと、苦笑を禁じ得ない。桃介はぬけぬけと、実家に洋服代を無心する甘えた手紙を書き残しているのだ。

「人は出自ではなく能力次第」とする考えを立証せんがために、桃介自身が自らの貧しさを誇張して話す習癖があったところへ、なんとかして桃介を貶めたいと願う勢力がそこに悪乗りして、中傷の材料としたことから桃介貧民説が定着してしまった。世界経済に漕ぎ出す護送船団の指揮官ともいうべき福澤諭吉と、船団から離脱して、離脱した位置から改めて官との然るべき関係を結びなおすのに苦慮し、貞奴という政界に通じた女性の助力までをも必要とした桃介。実に面白い対比だ。諭吉と桃介の水面下での密かな「ずれ」。それが簡単なものではなかったことを承知しつつ、両者共に尊厳の衣に包まれた英傑であるが故に、そっと蓋をしておかざるを得ないのであろうが、近代産業史を語る際の禁忌のひとつにしてしまうのはいかがなものか。いずれは覆いを剥いで語らねばならないだろう。

結核で倒れ、その間に株で財をなし、丸三商会の設立と倒産を経つつも、相場でさらに財を積み上げていった桃介の知謀を諭吉は快く思わず、そのこともあって、夫婦仲が冷えていったのであろうが、そういった個人の私生活上の問題とは別の次元で、より大きないくつかの差異が根本的な対立の原因として、横たわっていたのではないかと思われてならない。そのひとつが官との関係の持ち方であったことは論を待たない。官の内から外へ出た諭吉と、外から官に働きかけた桃介では立ち位置と向きが逆であった。あくまでも弟子は師に従順であるべしと考えた諭吉と、より自在な独立精神を謳歌したかった桃介では、飛距離や行動半径の描き方がまるで違っていたのではないだろうか。

桃介が何度か人生の転機を迎えている間に、日本の電力事業はようやく揺籃期を過ぎつつあった。その渦中にあって、名古屋電燈は旧士族による散漫経営で苦しい状況に陥っていたのである。

そもそも名古屋電燈の勧業資金請願を斡旋したのは藩を廃して誕生した県当局であった。電燈事業構想は旧尾張藩の士族卒族の代表と勝間田愛知県知事の協議から生まれた。どのような業種が勧業資金運用に適切か思案していた勝間田知事に、電燈事業がすこぶる有望であることを説いたのは、官僚

として赴任してきた元尾張藩士の丹羽精五郎であったという。勧業資金七万五千円の貸し下げが決定し、一八八七年(明治二〇年)、旧藩の士族・卒族の委任を受けた九九名の総代が開業委託願を勝間田知事に提出した。しかし、士族商法に危うさを感じた勝間田知事はここで面白い条件を出している。実業家に別途、公募株式を引き受けさせ、資本総額を二〇万まで増やし、なおかつ経営を実業家側に委任するようにと命じたのである。こうして一八八七年(明治二〇年)九月二二日を以って名古屋電燈会社を発足すべく創立認可指令が出たのであるが、士族側の激しいブーイングと実業団側の資金不足で、勝間田構想は実現に至らなかった。資本金も七万五千円をやや上回る七万八八〇〇円にとどまり、勝間田の思慮は灰燼に帰した。県の補助金や士族就産所をたたんで得た剰余金、旧尾張藩主、犬山藩主など、宗家筋からの寄贈を加えての資金調達などをみても、設立当初の主導権は正真正銘、士族授産の恩恵を受けた旧士族たちにあった。社長は旧尾張藩士三浦恵民。このグループが後に、桃介の近代経営改革に立ちはだかる一大抵抗勢力となるのである。

桃介が名古屋電燈と関わるようになったのはずっと後の明治四二年頃からである。三井銀行名古屋支店長矢田績の勧めがあったからだという。が、そこに至る以前に、周到な水路が秘かに深く穿たれていたと見るべきではないだろうか。何故なら、桃介が水力発電、特にダム式発電に興味をそそられたのはずっと以前からであったと思われるからだ。筆者は、おそらくアメリカ留学中の岩崎清七との交流あたりからではないかと推察しているのだが、それをもって確たる証拠とするには脆弱すぎるだろう。が、桃介の放蕩の原因を親切に問いただすために、水力発電視察のチャンスを岩崎清七が棒に振ってしまったと聞けば、それは桃介の胸にこたえるインパクトとなったに違いない。エジソン存命中のアメリカにあって、好奇心旺盛な桃介が興味を喚起されないはずがないのだ。

「福澤桃介翁伝」中の記述によれば、桃介帰国後の明治二六年四月の時事新報社説で、諭吉が、西洋諸国における水力電気の発達に触れ、これが日本の将来にいかに有用かを力説するということがあった。電力すなわちホワイト・コールとしての認識であったようだが、これが桃介にいよいよ強い確信を与えたに違いないという人がいる。が、その逆もあり得る。洋行帰りの桃介が義父に向かって、「お父さん、これからは石炭よりも水力発電ですよ」と力説している姿をつい、想像してしまう。よき生徒は師から学ぶ以上に、たくまずして、よきヒントを師に供給しているものだからである。

勤め人が性にあわない桃介は絶えず八方に目を配り、有望な事業を探し、独立の機をうかがっていたと、井上角五郎が証言している。桃介の電力事業への積極姿勢をうかがわせる証拠がある。明治三二年に親友の石井甲子五郎と連れ立って利根川を視察し、後の関東水力の佐久発電所の位置に水力電気の出願をしている。三九年には佐賀県の廣瀧水電の大株主となり、四一年には豊橋電燈会社の取締役になり、ほぼ同時期に、博多の福博電気軌道会社の発起人となり、四国でも高



松電気軌道会社の創立に関与している。なんでもいいから有望な事業を探していたにすぎないと福澤桃介翁傳には書かれているが、それは桃介の先見の明の鋭さを知らなすぎだし、傍らに盟友の松永安左エ門がいて、さかんに電気事業の有望なことを議論しあっていたということもある。気乗り薄を装ったのは実業家特有の、とぼけた韜晦と解すべきであろう。

ところで、明治期のアメリカ留学は、だいたいが福澤諭吉経由であった。三菱財閥の岩崎一族を見ると、岩崎弥太郎の弟の弥之介、弥太郎の長男の久弥もアメリカへ留学している。久弥は慶応義塾の幼稚舎に入塾して、途中、身内の三菱商業学校に移ったとはいうものの慶応義塾普通部を卒業。明治十九年に渡米し、二一年にペンシルバニア大学に入学している。そして、肝腎なことは、この一族もまた相当早い時期から水力発電の先駆性を知っていたということだ。桃介の旧姓は岩崎であるが、これは三菱財閥の岩崎とは関係がないことになっている。とはいうものの、遠い異国で同一の姓を名のる者が同じ福澤門下生として顔を合わせれば親近感もひとしおであったことだろう。桃介が留学中に財閥の御曹司、プリンスと錯覚されたというが、そのような人間関係の網目も、ひょっとすると関係していたかもしれないのだ。とにかく桃介と岩崎久弥との結びつきはアメリカ留学中にルーツを持つ。在米中は時の大統領と握手し、メッセージを手渡す機会さえあったというから、先に留学していた諭吉の二人の実子をとうの昔に跳び越えていた格好だ。六ヶ月かかる学校を四ヶ月ですませ、生ぬるい学校生活より鉄道会社での実地研修を選ぶなど、外国語圏でよくぞと感心する活動ぶりだが、すばしっこく人間関係を構築して、後々のネットワークまで築いておくあたり、先の先まで見越していたようで、尋常ではない。

衝突もしている。桃介と三井銀行の中上川彦次郎(諭吉の甥)等とは意見が合わなかったようである。桃介が松永安左エ門を誘って起ち上げた丸三商会が乾坤一擲の勝負に出たとき、諭吉と諭吉の強い影響下にあった東京興信所や銀行筋がそろって背を向け、信用を失墜せしめられたことから、桃介は意地でも諭吉の操り糸の先にあった三井・三菱の資金は頼るまいと決意したと伝えられている。諭吉は北炭に対抗しかねない丸三を潰して桃介を北炭に取り戻したかったのかもしれないが、桃介はそのようなあてがいぶちに自足できるような器ではなかった。この亀裂によって、桃介は福澤一門と諭吉の影響下にあった経済人のことごとくを敵にまわすに似た苦境に追い詰められていき、相場で築いた自己資金力でこれを切り崩し、劣勢を挽回し、遂には完勝したのだ。

四面楚歌の中で、岩崎久弥のみが例外であったのだろうか。明治四二年から翌年にかけて、桃介が名古屋電燈の株式一万株を取得し、筆頭株主となったとき、資金の出所は三菱財閥三代目総帥岩崎久弥その人であった。弱者への配慮を忘れない温厚な人柄の久弥には桃介も胸襟をひらいたことであろうし、電力事業の分野への投資を考えていた久弥が桃介に白羽の矢をたてたことも頷ける。しかし、あのような時代に、士族出身者が主流を占める保守的な会社に対し、目の覚めるよ

うな鮮やかなＴＯＢを仕掛け、これを成功せしめたのである。受けた側にしてみれば、まさに晴天の霹靂、乗っ取り以外の何ものでもなかったであろう。三井銀行名古屋支店長矢田績、三菱総帥岩崎久弥がキーパーソンであったことに、いっそうの衝撃が走る。

諭吉が生きていれば目を剝いて卒倒したかもしれない。つまり、こういうことだ。諭吉の死後、桃介は三井も三菱も自家薬籠中のものにしてしまった。言い換えれば、経済界の側が諭吉流から桃介流へと意識改革を迫られたのだ。明治維新前後の、欧米に遅れをとったことへの慙愧に充ちた情緒的な合理主義を、超絶スピードで駆け抜けた日本が遂に、さらに先を走っていた桃介の背中を視野に入れたということだ。その瞬間を象徴するのが桃介の名古屋電燈入りではなかったか。桃介に導かれ、最先進国の人々も及ばぬほどの洗練した冷徹な合理主義へと日本経済が脱却しようとする一瞬の、これはまさに典型的な事件であった。こうして桃介は先駆的な人々によって、時代の寵児として認知されるに至ったのである。

そこに到るまでの名古屋電燈の沿革を再度、さらってみよう。明治二三年、名古屋電燈は四月の商法公布にのっとって定款を改め、名古屋電燈株式会社と改称した。明治二四年には京都電燈が日本で初めての水力発電として琵琶湖疏水を利用した蹴上発電所の送電を開始。不要になった火力発電所を名古屋電燈が引き取っている。同年の濃尾地震や明治二五年の大須の大火にさらされた名古屋の住民は、ランプによる火災の危険性が身にしみ、こぞって電燈に切り替えるようになったので、電燈契約者は五年で十倍に増えた。

明治二六年に岩崎久弥は三菱合資会社社長に就任した。同じ頃、桃介は北炭を一旦、解雇されたが、井上角五郎の実権掌握を機に再雇用されて後、猛烈社員に変貌した。しかし順風満帆と思えた桃介は二七年に喀血。諭吉の手厚い支援を得ていた北里柴三郎の養生園に入院し、一命を取りとめた。療養中、株に手を染めて大成功し、名だたる相場師と目される きっかけとなった。桃介といわくのあった葭町一の名妓、奴こと小山さだと川上音二郎が、伊藤博文の腹心である金子堅太郎の媒酌によって華燭の典を挙げたのもこの頃だ。そしてなにより、明治二七年という年に日清戦争が勃発しており、相場は異様に加熱した。二八年末、大阪鉄道株を換金した桃介は十万円を手にしていた。元手の千円をたった一年で百倍に増やした勘定となる。

桃介にとって株は博打ではない。綿密を競う知能ゲームであり、「いくらいくら儲かった」と吹聴することは俗人から見れば、金儲けを自慢しているように聞こえたであろうが、桃介が誇ったのは推理力、予知力の正確さである。子どもがゲームに勝ったときのように邪気の無い喜びようであったが、嫉妬に狂い、欲に目のくらんだ人間ほど桃介という人間を見誤った。桃介の怜悧さを評価し、後日を期した人の中には岩崎久弥のような大人物もいたのである。諭吉ではなく、桃介のほうについていった松永安左ェ門もまた然りであろう。



日清戦争で電気需要が増える一方、石炭の値段は急騰した。二七年に、火災に懲りて石油ランプの使用全廃を決議した大須の遊郭の大口需要をあてこんで、資本金十五万円の愛知電燈(株)が発足したが、後に桃介の補佐役として活躍する佐治儀助はこのときはまだ遊郭の楼主で、愛知電燈(株)設立のキーマンであった。この愛知電燈(株)と名古屋電燈(株)の間で値下げ競争が激化。過当競争の弊害を懸念した日本電気協会の指導で合併することになり、両社の株式に加え、さらなる増資を実施して、資本金五十万円の名古屋電燈(株)が再出発したのである。これが明治二九年。愛知電燈(株)側からの取締役は小塚逸夫と佐治儀助。社長権限をもつ専務取締役は三浦恵民という陣容であったから、旧士族の主導権は変わらない。世は未曾有の電力ブームで、愛知馬車鉄道(株)は名古屋電気鉄道(株)と名前まで変え、自前で火力発電機十数台を据え付けて電車を走らせたという。しかし、利のあるところ欲が渦巻き、欲には体裁よく目隠しをしたとしても、運営上の路線の対立はつきものであり、派閥抗争が泥沼化していくのも世の常ということであろうか。名古屋電燈(株)も例外なくその対立図式に呑み込まれていく。

名古屋電燈(株)が水力への参入を試みたのは庄内川が最初と思われるが、これは断念している。木曽川に狙いを定めていながら、明治三九年五月になって突如として長良川水力発電の提案が浮上したという。これは明治二八年に岩村藩藩士小林重正が京都電燈の水力発電に触発され、岐阜県知事に申請を出して明治三十年に許可されていたのが三七年に取り消され、水利権が消滅してしまった事情を小林重正が名古屋電燈に話し、事業の継承を持ちかけたところに端を発している。名古屋電力(株)も同じ場所に申請を出す準備を進めているという情報があり、緊急の判断を迫られたのだが、名古屋電力(株)の機先を制すること僅か一ヶ月という危機一髪の対応であった。名古屋電燈と小林重正の電光石火の連携プレイが功を奏したのである。名古屋電燈はそれ以前に既に秘密裏に木曽川の調査を始めており、全社をあげて、一気に水力へと関心を傾斜させていった。

小原と瀬戸に水力発電所を設けていた東海電気を明治四十年に合併したことも、この流れを加速した。このとき、工事中の巴川発電所と千種変電所も取り込んでおり、明治四一年に全操業運転開始となった。火力から水力へ。こうしたプロセスにおいて名古屋電燈は、資本金総額一二五万円の大会社へと成長していったのである。当初、東海電気は名古屋電力と合併して名古屋電燈(株)に対抗しようとしていた。東海電気の筆頭取締役近藤重三郎は名古屋電力の筆頭大株主でもあったから、これは当然の成り行きであった。それが東海電気の株主総会で否決され、一転して競争相手だった名古屋電燈(株)との合併へと転じたのである。

これらの出来事を指標として、筆者は日本資本主義の部分的先駆的モデル形態と見る。曲がりなりにも所有と経営の分離という現象を垣間見ることができるからである。株主側と経営陣が異なる判断を下すことがあり、それを株主総会が決

するという近代型経営へと脱皮したパイロットケースと見ることができる。そして会社は第三者の参入を可能とする公器へ。ここを桃介らの新進気鋭の事業家は介入し得る好機と見て、株の買占めという新手を駆使して乗り込んでくる「余地」が発生したのである。しかも、桃介登場の露払いの役目を担ったのが銀行マンだったということは、金融資本が産業資本をコントロールするという、ずっと後に一般化する形態の予知的現象と見ることができる。それはまた、諭吉時代には政府という「官」が握っていた産業誘導の操縦桿が「民」の手に渡ったことによって、初めて可能となったともいえる。諭吉時代から桃介時代へ。社会のほうが舵を切ったのだ。

しかし、人は石垣、人は城というが、迎え撃つ側は鉄壁の団結を示す旧士族軍団であった。桃介にしてみれば「理屈の通らない」感情的反発に、打つ手なしであったに違いない。ところがここに外様ともいうべき新興の内部勢力が育っており、これが桃介と手を結んだ。元愛知電燈(株)出身の取締役、佐治儀助らのグループがそれであった。この新勢力が時代の波にのり、旧勢力を圧倒していったわけである。

電力業界こそ、桃介の真骨頂を発揮する絶好の舞台となった。電力という最新のエネルギー産業は技術革新の原動力であり、かつ象徴であったから、経営主体もまた、それにふさわしい見識の持ち主であるべきだった。そしてもう一つ。経営者の品格ということがある。性急に利を追うのではなく、近未来の、いうなれば国家百年の計を構想し、それに即して現在の舵を切る、そのような大器にこそ、企業経営は委ねられて然るべきだ。岩崎久弥、矢田績、下出民義といった人たちにも、そのような品格が備わっており、なおかつ合理主義的経営の素養があったために、桃介の資質を高く評価することができたのであろう。日本産業界が、資本主義の階梯を踏み上るために、桃介の登場を満を持して待ち焦がれていたというべきか。桃介登場の方法も斬新であった。経営の主導権争いを株の操作でもって決するのであるから、相場に通じた桃介からすれば、封建時代のくすんだ情念にとらわれて動きを制限してしまう旧士族など、赤子の手をひねるようなものであったに違いない。だからこそ、岩崎久弥にしても矢田績にしても、この男こそと、桃介に電力業界の未来を託すことにしたのであろう。ノイズを排除してクリアに物事を進めていくことのできる、当時の人々からすればエイリアンと見紛うばかりの近代合理主義的経営者、それが桃介であった。

しかしまた、桃介という同じ一人の男が旧時代の和学・漢学の歴史的累積的教養を、他の追随を許さぬほどに血肉化していた事実も閑却してはならない。なぜなら、桃介のこの水面下の基礎構造こそが、経営者としての品格の土台になっていたと考えられるからだ。現代の根無し草的秀才とはここが根本的に違う。明治人の骨格の太さに、現代人が及ばぬ由縁もこういう所にあるのかもしれない。

**主要参考文献**

「福澤桃介翁傳」昭和十四年 福澤桃介翁傳記編纂所
小林利恵 小平昌久編「福澤桃介論策集」平成二二年復刻版 西園寺圖書



# 禁漁女譚

## ～芸者という記号の変遷～

藤本尚子

### 序

一族の中から芸者を出すということは、いったい不名誉なことなのだろうか。それはわたしにとって、子ども時代からの変わらぬ疑問であった。昔は遊郭であれ、料亭であれ、地方都市にも相応の男たちの遊び場というものがあって、そこには独特の艶やかな文化というものがあり、洗練された遊芸と立居振舞があり、要するに格式のようなものがあって、別世界という認識はあったかもしれないが、実際には蔑視の対象とはなっていなかったような気がしてならない。戦後のことで、和菓子の製造卸に関わっていたわたしの一族は、いわゆる赤線が消滅して売春が違法とされるようになった時代に、芸者置屋がまだ散在していた花街と周辺の農村地帯を結ぶ商店街の一画に、新たに直営店を設けることになって、わたしはその商家に育った。

小学校の行き帰りに、近道をしようとして、花街に交差する狭い路地を抜けようとすると、朝顔の蔓を這わせた垣根をもつこじんまりした家があって、そこから三味の音や都都逸などが聞こえてきた。地続きに、黒く焼いた木を組み合わせて築いた塀などもあって、香の匂いが流れてくることがあった。午後の三時にもならぬのに、浴衣がけの臈たけた女性がカランコロンと下駄の音を響かせて、洗面器を抱えて銭湯に行くのとすれ違ったりする。わたしは大きなお風呂が好きで、母にねだって銭湯に行き、湯上りに好きな飲み物を番台で買ってもらうのを楽しみにしていた。清潔を期すためには一番風呂がよいのであるが、その時刻、湯に出入りするのはほとんどが玄人筋の女性たちであった。その時代にはもう、遊女というのは一人もいなくて、十人にも満たない年増の芸妓さんだけが残っており、そのほとんどがこの界隈に住んでいたようだ。わたしの家の向かいは美容院だったのだが、だいたい午後四時をまわるまでに、洗い髪の芸妓さんたちが、ちらりほらりと髪結いにやってくる。抜いた襟からのぞく項の白さに、ほとほと目を奪われたものである。稀に日本髪の正装で出てくることもあって、タクシーに乗り込むときさえ、高々と結い上げた髷の先から着物の裾を持ち上げる指の先まで、しゃんと行き届いた優雅な身ごなしで、常に周りの目を意識した「魅せる存在」として、一部の隙もない有様に、ほうと熱い溜息がこぼれた。名妓といわれる芸妓さんたちを、わたしたちは源氏名で呼んだものだが、そこにはいわく言い難い尊敬の念すら混ざっていたように思う。商店街の人たちは老若男女を問わず、幾分の憧れをもって見守っていたような印象があった。だから近隣の少女たちはみな、わけもわからず芸妓さんになりたいといって、親たちを困らせたものである。

そんなとき、大人たちから聞かされたのが、その地では豆と呼ばれていた下地っ子たちの日常の起き伏しの厳しさであ

った。わたしたちの親の世代は、いわゆる身売りで置屋に引き取られてきた少女たちと、小学校で机を並べてきたのであるが、とにかく可哀想で可哀想で見ておれないほどであったという。戦後のように体罰禁止の規程などはなかったから、稽古で間違うと容赦なく三味線の撥でぶたれたという話を何度となく聞かされた。板前の修業なども同様で、包丁の背で頭をなぐられたというからすさまじい。実際に傷跡だらけの頭を料亭の板長さんに見せてもらったこともある。すべからくそういう修業を要する時代であったのだ。そのような辛抱の累積の果てに道を究めた人ということで、商店街の人々は敬意を払っていたのかもしれない。たかが芸者とか、芸者風情が、といったような侮蔑的な言辞に遭遇したことは一度もなかった。少なくともわたしの周りにそういう差別意識は存在しなかったと思えるのだ。それどころか、芸者というのは、「美」の価値尺度にしたがって、圧倒的に優位の記号性を帯びていたとさえいえる。この体験は果たして異常だろうか。

なぜこのような懐古譚を持ち出すかというと、後年の貞奴が、自ら芸者の道を選んだと述懐していることに対し、四〜七歳の幼児期に、そんな判断などできるはずがないと嘲笑う意見があるからである。大人になった貞奴が実家と自分の名誉を慮って、身売りされたのではなく、自ら飛び込んだかのように糊塗し、嘘をいっているに違いないと、執拗に決めつける風潮があるからである。本人と関係者一同が声を大にして、それは違うと証言しているものを覆すには、それなりの論拠がなくてはならないだろうにと、まるで暴力現場を目撃したような居心地の悪さを感じ、無念でやるせない思いにしめつけられる。翻って、もし幼い子が芸者になりたいといったとすれば、それは芸能人に憧れる現代の少女たちと少しも変わらないのだということを、実例をもって証言したかったのである。

もう一つ指摘しておきたい。西洋に渡ったときの貞奴の洋装のセンス、あるいは彼女が意のままに建てた別荘「萬松園」の高度な洗練性を考えるとき、彼女の美意識の並々ならぬことに驚くのであるが、この種の美的感性こそ、先天的に貞奴個人が生まれもっていたものと解釈することができる。すると、幼い少女の見聞きした少ない経験の中で、粋の頂点にあった濱田家可免吉(はまだやかめきち 実名：濱田可免)という美しく賢い女性と、美という価値尺度において、花街という特殊な文化領域に、どうしようもなく惹かれるというのはあり得るどころか、むしろ必然といっていいほどではないだろうか。朴念仁には理解し難い次元の話ではある。

ただし、問題は本人ではなく、周囲がそれを許容するかどうかだ。そこに文化記号論的要素が潜んでいる。仮に貞奴の生家「越前屋」が没落することなく、栄華を極めていたとして、それでも利かぬ気な子が、どうしても芸者になりたいといって駄々をこねたとしたら、どういうことになっていただろう。芸者「奴」は、そして女優「貞奴」は誕生していただろうか。それとも家の名誉などという不粋に、あっけなく押しつぶされていたであろうか。あるいは京における舞妓修業



のように、名家のお嬢様が少女時代の一時期、美しい立居振舞を身につけるためという理由で舞妓を経験するように、粋な計らいとなっていたであろうか。越前屋の羽振りのよかった時代に、貞奴の母親 多加(たか)が、その娘時代に日本舞踊を習っていたことを考えあわせると、紙一重の位置にあったといえそうである。それを窺うには時代とロケーションによって、芸者という記号がどのように変遷していったかを振り返る必要があるだろう。

## 特上牛ロースを鶏モツといっしょに水煮する

芸者と遊女はそれぞれに異なる地域でそれぞれに誇るべき異なる文化を担っていたのが江戸という時代ではなかっただろうか。遊女は廓に囲いこまれており、そこには独特の位階があった。花魁の教養などはダントツで、大名相手でも怯まず、戯作者や絵描きなど、要するに芸術家に相当する客が何日か居続けても、少しも飽きさせないほど多様な才があり、流麗な草書でさらさらと短歌や俳句をしたためたという。どの世界にもそれぞれに几帳面な秩序というものがあって、どの領域であっても、達人の域にあれば尊敬を得ることができた、そんな時代であったといえるのではないだろうか。それが一括して併記され、格別に被差別的なニュアンスで囲いこまれるようになったのは、むしろ近代からではないかというひとつの疑問に、わたしはいま遭遇している。

明治五年の、あのマリア・ルース号事件によって、人種差別に基づく「人身売買」の犯罪性に気付いた日本国は、国際社会に向かって人権擁護を高らかに宣言し、船に奴隷として捕われていた清国人たちを解放した。すると奴隷船の所有者であったペルー側は、日本国内で横行していた女性たちの「身売り」を指弾してきた。日本政府は即座に「芸娼妓解放令」を出して、女性の売買を禁じたのであるが、この瞬間に不当にも、芸者と娼婦が一括されてしまい、その上、多くの自前芸者までが「解放」対象のごとく錯覚されてしまったのだ。芸を披露して収入を得る職種と、性的奉仕に対して支払を求める職種は大工と左官のように隣り合わせではないにもかかわらず、「身売り」という一部属性のために、いっしょくたにされてしまった。文化的属性の抹殺でもあった。「娼妓」に至っては、高い教養を誇っていた花魁から乞食の手前の夜鷹まで、これも同じ鍋に投げ込まれてしまった。

もう一つが婦人解放運動である。修練を必要とする「芸」の側面や文化的側面を認めず、一方的に、「男の性的玩弄物」という鋳型に押し込め、はみ出たものを切り捨てることによって、「美」に関して優位に立っていた玄人女性たちに対し、女性解放の大義名分によって素人女性軍が絶対優位を勝ち取り、溜飲を下げたという、着物の裾の下着が見えてしまうことがある。

こういった次第で、人権、人身売買、婦人解放などの近代用語が突出して表立つことによって、それらの言葉の普及と共に、却って意識内の差別を生むというパラドキシカルな現象が起きてしまったのではないだろうか。なぜなら、それに

よって、そこに蓄えられていたゆかしさ、洗練、粋の概念など、誇り高くあった女性たちの気概を打ち砕き、ただただ哀れな存在として描き出す結果となったからである。

## 木綿と絹

江戸時代、大工や左官、飾り職人など、それぞれの職域にある者が修練の度合いに従って、それぞれの位階をもち、時には儀式なども執り行いつつ、誇り高く位を上っていった精神風土を考えると、士農工商の「身分差別」なるものも、近代以降のわたしたちが想像する身分差別とは、いささかニュアンスが異なっていた可能性をなしとしない。とりわけ女性たちによる男性社会の「脱構築」ほど痛快なものはない。遊び場では、支配階級の武士に鼻つまみ者が多く、「二本差し」という呼び方はまだしも、「浅葱裏」などという軽蔑用語まで存在した。江戸小紋を裏地に使って洒落を競っていた鰤背な江戸っ子ファッション全盛期に、野暮な国侍の流行遅れをいまでいう「ダサイ」の典型とみなして、そのように罵ったのだ。つまりそれだけ価値が多様であったということになる。

身分を超えての通婚の禁止ということはあったが、それを超えての男女の結びつきを可能とするための補助制度が別に存在していて、それが「側室・妾」という目こぼしであった。男性にのみ有利なこの仕組みが女性間の身分差別を脱構築していたことが滑稽ではある。女性は正室にこだわらなければ身分をどのようにも飛び越えることができたからである。行燈を引き寄せて薄暗がりの中でつましく古い着物を繕う一般の素人女性と、絢爛豪華な絹に包まれて正室と妍を競いあう女性陣の二種類を比べると、後者に関しては出自の身分お構いなしだったということになる。もちろんこれは逆説的な特殊な見方にすぎないだろう。かくいうわたしもまた、基本的な足場を近代合理主義の解放思想に置いているのだ。しかし、ちょっと重心をずらし、踏みなれた台から爪先を出してみると、案外涼しい風が吹いていて、おやっと思うのだ。

ひょっとすると戦後のわたしたちは、「差別」と「区別」の区別すらつかない石頭になってしまったのではないだろうか。スピッツとブルドックを「犬」と概括することによって、純白の美しい毛並や顎の垂れた皺顔などの差異に、できるだけ目をつむるようにしつけられてしまったのではないだろうか。そんな粗末な頭脳でステレオタイプ化された「貞奴」という記号に向き合っているのだから、何をかいわんやである。

## 反転した劣位の記号

明治維新とは、多種多様であった文化秩序の一斉崩壊を促す大号令であったということができる。とりわけ愉快なのは身分差別の廃止で、通婚の禁止が解かれたことだ。それかあらぬか、桂小五郎に尽くした京の芸妓 幾松は木戸孝允の正室松子となったし、かねがねその二人に憧れていたという伊藤博文は前妻と離婚して、元馬関の芸者 梅子を正妻として娶った。陸奥宗光の亮子夫人も芸者出身であったという。今にたとえると、元スチュワーデスの妻を持つことを男たちが自慢するように、元芸者の妻を持つことがカッコイイ時代が出現



していたといえるだろう。そして、政財界の大物すべてを取り仕切る力をもっていた女帝ともいうべきかの有名な、富貴楼の女将 お倉さん(本名 たけ)も、珍しいことに、元遊女から改めて芸者になった。植木屋の放蕩息子で亀さん(亀次郎)と呼ばれた江戸前の遊び人を情夫にしたため、住み替えと称する転売につぐ転売で、とうとう横浜に流れ着いたとか。明治四年に井上馨に頼まれ、相場で財をなした田中平八を紹介し、この二人のドル調達に関する密談の場として、小料理屋を始めた。これが明治六年に尾上町(横浜市中区)に移転し、超一流の料亭となった。洋行する紳士淑女のことごとくが出発前、ここでいったん草鞋を脱ぎ、旅装を新たにして旅立つようになった。福澤桃介の証言によると、色白で品のよい女性であったという。横浜にありながら、関東一円の花街のことごとくを捌いたといわれるが、各界のトップを相手に、いまでいうフィクサーのような働きがあってのことだ。憲法草案作成のために夏島に引き籠った伊藤博文も、そこに給仕役として送り込まれた小奴時代の貞奴も、このお倉さんの元から船出したのだ。彼女のことを語る人々の言葉の調子は、鷹揚・磊落・闊達な語り口で、彼女の前歴を忌む響きはどこにもない。

そのような気運が一般的であった時代に、芸者を目指すことが、それほど不名誉なこととされていたかどうかだ。芸者といえば必ず「身売り」を連想するようになるのは松方デフレや第二次大戦前の農村の困窮で、それが多発した時代の陰影にすぎない。芸事の好きな職人の娘などが自前芸者になることが普通に見られた江戸期の風潮の延長上では、よほど事情が違っていたのだろうと、酌量するくらいの柔軟性があっても罰はあたらないだろう。

まさか将来、低い身分として記号化されようとは夢にも思わず、これからは芸者の地位は天井知らずとなり、女大学に匹敵する業界になるのではないかと、そんな展望すら描かれた一時期に、貞奴は芸者の世界に身を投じた。スチュワーデスが才色兼備の記号になることもあれば、リスクの大きい職場のただのウェイトレスという記号に貶められることもあるように、芸者の意味するところも様々なのだ。貞奴にとって、芸者とは「芸の練達者」を意味したであろうし、幼い日のわたしにとっては「美の体現者」を意味した。芸者を酌婦のように思う人は、ただの酌婦を芸者として売り込んだインチキしか知らないからだ。芸者と身売りを不可分に思う人は、その二つが不可分であった不幸な時代を生きてきたのであろう。冷や飯に酢を混ぜた程度のものをスシと呼ぶこともあれば、大間のトロをちょこんと載せた新米ササニシキのにぎりをスシと呼ぶこともあるように、「芸者」のイメージも千変万化だ。そのうちのよくない一つがひとり歩きしてしまった。

ミシェル・フーコーが「言葉と物」で警告したように、われわれは、その時代その時代に新たに編集された記号の集積のテーブルの上で、歪んだ判断を得意げに語る愚かな存在にすぎない。その種の誤謬を極力免れるために、物事の土台となっている「歴史」の断面を精緻に解析しようとする姿勢くらいは、せめて心がけたいと思うのである。

## 貞奴研究の現状

1.山口玲子著「女優貞奴」1982 年
2."Madame Sadayakko: The Geisha Who Seduced the West"
2003 年 by　Lesley Downer
同　木村英明訳　「マダム貞奴」2007 年
3. "Japanisher Theaterhimmel über Europas Bühnen: Kawakami Otojiro, Sadayakko und ihre Truppe auf Tournee durch Mittel- und Osteuropa 1901/1902"
2005 年　by　Peter Pantzer
4.森田雅子著「貞奴物語－禁じられた演劇－」　2009 年

ここに一冊の書物があります。レズリー・ダウナーによって書かれた「マダム貞奴」です。「西欧を魅了した芸者(2007 年木村英明訳では世界に舞った芸者)」という副題が付されています。貞奴について書かれた本は多数ありますが、信頼に足る最良のものを選べといわれたら、躊躇なくこの一冊を推薦します。

この書物に先立って、1982 年に山口玲子が「女優貞奴」を上梓していますが、この時をもって貞奴研究は漸く緒についたと考えてよいでしょう。ダウナーの書は、基本のところで山口玲子の著述をベースにしながら、欧米における貞奴への評価を機軸に据え、そこから逆照射することによって、日本での貞奴に対する俗評を根本から覆すという革命的な意義をもっていました。

ダウナーによる欧米における貞奴評を検証する上で最重要となるのが Peter Pantzer 著 "Japanisher Theaterhimmel über Europas Bühnen"です。これは現在、わたくしどもで翻訳に取り組んでおりますが、序論等をふくめますと、1200 ページに近い大著で、1901 年から 2 年にかけて、川上一座がドイツから東欧一帯を歴演した第二次ヨーロッパ巡業を克明に辿ったものです。古今東西を通じ、ヨーロッパ全土をこれほど熱くさせた女優が存在しただろうかと、当時の新聞記事などの膨大な資料を駆使して、貞奴の魅力の本質を、芸術史上の特記事項として、世界に問いかけるものとなっています。

さて、ダウナー女史の話にもどりますが、彼女は日本に、というより「芸者」や「遊女」「側室」などの世界に多大の関心を注いできた作家で、1978 年の来日以来、15 年以上、日本に滞在する、あるいはロンドンの住居と行ったり来たりするというような生活スタイルで、調査・研究を続けていらっしゃいました。そのため、貞奴を扱う目線が時として、どうしても「芸者」一般の習性のようなところに傾斜しがちです。

ステレオタイプ化した「日陰の女性」を徒らに投影するのではなく、むしろその帳(とばり)を取り除くところから、今日の貞奴研究はスタートすべきだと考えます。なぜかというと、歴史の中で、芸者という記号そのものが激しく変貌しているからです。

最近では女性史の文脈で貞奴を捉えなおそうとする動きが活発になっていますが、その筆頭ともいうべき諸論文を書いているのがペンシルバニア大学の加野　彩です。いわゆるフェミニズム、ジェンダー論のコンテキストに貞奴を埋め込んだにすぎないということもできますが、舞台芸術において、女性役は女形によって演じられると決まっていた歌舞伎の伝統を覆し、初めて女性が女性を演じたという点、そして貞奴自らが女優養成所を創設して、近代演劇に多大の貢献をしたという点で、オーソドックスな評価をもたらしたといえます。

いまひとつ、注目すべきは貞奴が子女教育に果たした役割です。川上絹布株式会社を創設したときの女工への待遇など、実働 7 時間で制服支給。茶道、華道を学ばせるなど、現代も及ばぬほどの手厚い福利厚生でした。そして晩年の児童劇団の設立です。福澤桃介の発電事業を助けたことはよく知られていますが、彼女個人の事業家としての手腕を評価する形にはなっていません。むしろ、桃介による貞奴への経済的支援の有無のみを疑問視し、その部分を誇張して語ることによって、貞奴自身の業績まで不当に過小評価するという俗説が横行しました。真実は桃介自身が中日新聞の矢頭氏に吐露したように、常に政治の表舞台にいる人々と親しい関係を維持してきた貞奴の人脈に、桃介のほうが縋ったという一面もあって、互いに得がたい事業パートナーでありました。そこまでに想像をとめおくべきでしょう。下世話な邪推で「貞奴」という偉大な女性の真価をくもらせても、得るものはありません。

もう一つ。音二郎・貞奴の海外公演における脚本・演技・演出について、ポスト・モダンの視点から再評価する大きなうねりが必ず湧き起こることでしょう。そういう欲求をある程度みたしてくれるのが森田雅子女史の著書だということも付け加えておきます。　(藤)



## 桃介・貞奴をめぐる空想的所感

# 木曽の御嶽山はなんじゃらほい

江尻勝典

人類の歴史に感動の真実が埋もれている
歴史の中に去った二人の人生を恭しく空想する

### 木曽の御嶽山はナンジャラホイ

日本の三名山の一つに御嶽山がある。それを人は「木曽の御嶽山」と言うが木曽は公式の名ではない。そもそも御嶽山は、飛騨と木曽に跨っているので木曽だけのものではない。そのため飛騨の衆には不満もある。更に「加賀の白山」も半分は飛騨にある。今更拗ねてみたとて詮ないが、飛騨から眺めても「加賀の白山・木曽の御嶽山」とは・・・・ナンジャラホイ。

### 御嶽山を独占

御嶽山は木曽の山と思われてしまうが、飛騨の衆にとって御嶽山は木曽に独占されていると思う。だからと言って揉めたとゆう噂は聞いたことがない。御嶽山は木曽と飛騨に跨る信仰のお山。天から降り注いだ雨や雪は、木曽側では山裾の王滝川から木曽川に流れ込み、飛騨側では山裾の濁河川から飛騨川に流れ込んでいる。天の霊験あらたかな水は木曽と飛騨に公平に配分されている。

### 木曽川には激流

木曽は今も昔も木曽川でもっている。昔は激流だった。

### 飛騨川にはせせらぎ

せせらぎは人の心を癒す。下呂温泉の川原に湧いた温泉は身を癒す。

### 木曽川の今昔

昔、木曽の山で育った木材を、木曽の男衆が木曽川の激流で川下へ運んで世に供給した。その木材は、銘木木曽の官材として価値があった。

今・木曽川には本支流合わせて三三箇所の水力発電所があり、良質な電気を発電している。その中にはダム式発電所もあり、ダム式発電所を日本で最初に建設した男がいた。名は福澤桃介（以下桃介）

### 桃介の運命と人格を詳らかにする

桃介は明治元年に生まれる。永く続いた徳川幕府が大政を奉還して終結した年である。政治的・社会的に混乱の時代だった。桃介は賢く逞しく成長する。顔立ちは穢れなく欧米風でエキゾチッチク。器量は勇敢で精緻で繊細、その類い稀を福澤諭吉に見込まれる。福澤は桃介を条件付きの家族としてアメリカ留学を奨めた。

アメリカは矛盾を悔やみながら自由の女神を敬う。USAは資本主義で大工業国だった。桃介は福澤の奨学に大感激したが、何故か訝しい。

渡米前の桃介はふとした邂逅が縁で三歳年下の貞と熱愛中だった。貞は秀麗な容貌に加え、若くして知性と礼節を備えていた。また天賦の慧眼は人の心の闇を諭す。この世に二人とない女性を、お偉い伊藤博文ほかお歴々も恋慕していた。ところが、当時では珍しく馬を乗り回し、また水泳をするなど変わり者だった。

留学の条件は貞と今生の離別を約束するもので、桃介は苦悩の運命に心は千千に乱れた。

貞は浮世離れした女、桃介の留学を日本の将来の礎と推量して悦んだ。才色際立つ貞の女心は、恋に溺れず失恋は胸に封じ忘却を装う。これは芸妓の身の定めと、置屋の女将可免吉に躾けられていた。

貞は人生・諸行無常と悟る故、人生は儚いばかりではない夢もある。と桃さんの心の乱れをおもんばかった。

人生は時の流れの中を旅するようなもの、旅の空も故郷の空も変わらないが、時が経てば人の身の上は変わる。桃介は経営に優れた実業家に、貞は大女優貞奴として世界にその名を馳せていた。この頃、桃介と貞奴は遠く離れていて音信もなかったが、お互いの消息は噂で聞き及んでいた。

桃介は貴重な情報源から、貞奴が政財界の大物と交流していることを知ることができた。一方の貞奴には風の便りしか届かなかった。噂は口に尊いと書くのに、とかく人の噂は信憑性に欠ける。桃さんの噂は、「立てば芍薬・座ればしわくちゃ・歩く姿はめちゃくちゃ」。これでも貞奴には大事な情報だった。

## 桃介は名利に恬淡・世の愚を覆す

人の世は、自分に逸れた者が実力もないのに名利に走る。これに正義感を掻き立てられた桃介は、体調を整え繊細な精神力で社長業に挑む。

正義の社長は名利で人格を飾らない。「憎まれて・嫌がられて・世を渡れ」と自若の獅子吼。

桃介は多くの会社を渡り歩き業績を上げる。特に社運の陰る会社を再建するときの桃介流は、人員整理は躊躇わず有能な者を退職させた。それは、企業は有能な働き手を必要とするので退職した者は再就職に困らない。

では何故わざわざ未熟な者を残したのか、それは労働者を人間として育成するためだ。働くことは何かと苦労が多い。困難と張り合うことで自立を覚らせる。天の声曰く、「自立は



自分に責任を持つこと・人に騙られたとき・騙った者を悪人にして自分を善人にしてはならない」

檄の一声・会社は世に貢献する・働く者は会社に貢献する・是を動機とする。

先ず心得・出社のため自宅を出るとき緊張感を持つ、会社を退社した後は帰りの道に迷わない。

自立を促す・会社で働く場所は神聖な処。一人の小さなミスが会社のミスになれば、経営は危うくなる。仕事は責任を持って丁寧に遣り遂げる。うまくいったら真摯に驕れ。困ったことが起きたら怖じけるな。困ったに困ることが困ったことだ。仕事の姿勢で立ち向かえ遣り遂げよ。うまくいったら驕れ。

桃介の教育的指導と厳しい訓練は働く者を鍛え上げた。会社が世に役立てば会社は栄える。それが働く者にとって映える名誉だ。名誉は自立の証しになる。未熟者の努力は実り、経営が好調になると、未熟だった者達は桃介に感謝した。

## 閑話夢想

貞奴は桃さんの影を慕いて「働く人達のために働く社長さんになってください。働く人達を働かせるだけの社長はイヤですヨ。何事も動機は必要です。動機には道徳的なものと邪悪なものとあります。道徳は愛です・愛は心の動機からなるものです・心は意識の深層にあり神秘です」と桃介の影に語る。

## 桃介の顔立ちは国際社会のビジネスに役立つ

桃介と貞奴・再会は運命の定め。桃介は聖なる動機による聖なる事業のため、福澤家をそっちのけにして貞奴と同棲した。「めおとでもない・他人でもない・淫らでもない」二人の関係は礼節を維持しつつ、睦まじく、神聖なものだった。

聖なる事業は、木曽川に日本で最初のダム式水力発電所を建設することだった。難工事は予想して工事を始めたが、自然は前触れもない。突然の豪雨は工事現場を跡形もなくした。その惨状に戦意は怯む。更に大災害は起こる。関東大震災は容赦なく日本の首都東京を直撃した。東京は大混乱となる。江戸幕府が江戸城を、官軍に明け渡すときでさえ江戸は無事だったのに。

工事に必要な建設費の調達はできなくなり、最早円には頼れない。そのとき貞奴は、天を仰いで運気を感じた雲のゆく彼方を眺めて真言を唱えた。桃介にはアメリカのドルが閃く。桃介は貞奴に急かされアメリカに乗り込んだ。桃介の穢れない欧米風でエキゾッチックな顔立ちは、国際社会のビジネスに役立ち、大金のドルを調達した。

## 貞奴は恐怖と邪気を祓う

工事の現場には危険もあれば邪気もある。目も眩む高い崖から深い谷底に降りるとき、俄か作りのロープで吊るした危険なバケットに乗らなければならない。工事現場で働く屈強な男衆は、足も身も竦み誰も乗れなかった。貞奴は男衆を見

損なうことはしないで、着物の裾をわざと高く端折り、艶めかしい足を見せてしなやかに、バケットを跨いで乗り込むと、後ろを振り向き色っぽい声で「いくわヨ・・・・」と、深い谷底に下りていった。

貞奴の艶めかしくしなやかな足の振る舞いは、男衆の恐怖を祓い、工事現場の邪気も祓われて、現場は神聖な処になった。

**西方浄土から声が届いた**

「この世に生まれて、貞は、貞奴の人生を女優として演じたのです。穢れの無い演技をしましたよ。皆さんの人生も清く美しく演じてくださいネ」。

あらたかな空想に法悦をもって終わる

承天



# 風流夢暦「可免吉異聞」

藤本尚子

※ここに登場する人物は実在した人物と同名であってもすべてフィクションとして構成されており、事実とは無関係である。

## 一　驟雨

鉛色の雲が隙間なく空を埋め、まだ午の刻の鐘を聞いたばかりだというのに、夕闇の迫るような暗さであった。「こりやあ、大降りになるぞ」と叫びながら茶店の亭主などは、女房を急がして露台の敷物を取り込んでいる。尻はしょりの職人衆も飛脚の足に負けじと駆け出すなど、常盤橋から日本橋本町に連なる界隈は俄かに慌ただしさを増していた。

笹模様の絽の着物に身を包んだ葭町芸者可免吉こと濱田可免は、昨夜の座敷で話題にのぼった新橋駅の工事現場を見物に行っての帰りであった。この五月に着工したというから、もう二ヶ月がたつ。客たちに遅れをとってなるものかと、勇んで偵察に出向いたのであるが、大量の石材に目をみはるばかりで、小ぶりな出城ほどにもなろうかと、規模の想像こそつくものの、まだ形も何も整ってはいなかった。がっかりしつつ、それはそれとして、宴席で話がそこに及んだとき、「あれだけ大量の石はいったいどこから切り出してきたのですかねえ」と、すっとぼけた合いの手を入れるくらいのことはできそうであった。しかしせっかく早起きをして、それも駕籠ではなく、ここ一年ほどの間に流行りだした人力車を早くから頼んでおいて乗り継ぎながら、気合を入れての遠出であったから、このまま帰るのはもったいない気がした。亡き夫の命日も近いので、何か買い物でもしておこうかと、金座の近くで、少しは人目も意識しながら、颯爽と俥を降り、ぶらつき始めたところへ、この雲行きとなった。

「こうしちゃいられない」と可免吉は、まだひと粒の雨も降っちゃいないのに、巾着袋を左手に持ち替えると、空いた右手で着物の裾を三寸ばかり持ち上げた。粋な裾模様を翻し、白いふくらはぎを覗かせて小走りに駆ける可免吉の風情に、「よ、水もしたたるいい女」などと声を投げて過ぎ去る男衆などもあって、すでに三十の半ばを過ぎた大年増だというのに、小娘のように耳朶を赤く染める可免吉であった。夫との睦言をふと回顧していた矢先でもあり、自分の中の女が疼き始め、それを外に悟られまいとうろたえる余り、項やこめかみの辺りまで血の気が充ちてしまった。そんな折であったから、「おや、ひょっとして可免ちゃんじゃないかい」と、やや鼻にかかった甘い声に呼び止められたとき、ぎょっとして、たたらを踏む始末となった。

「え」と振り向くと、その女は臨月なのか、こぼれそうな腹を抱え、鬢のほつれ毛をちょいとかきあげる仕草にさえ、大儀そうに肩で息をした。一瞬、誰だかわからず、可免吉はきょとんとした。無理もない。最後に顔を見てから、十数年、いや、かれこれ二十年近くも経っていたのではなかろうか。久方ぶりに逢ったその相手は、あまりにも様変わりしており、すぐには判別がつかなかった。髪結いも遠のいているらしく、丸髷はくずれ気味であったし、ひと昔前に流行った半襟の色は褪せ、大きな腹にゆるりと巻きつけた半幅帯は、元が上物であるだけに、縁の擦り切れたのが余計に痛々しかった。それでいながら彼女自身の声の響きには所帯やつれの痕跡はなく、「わあ、懐かしいわぁ」と、きゃっきゃっと、はしゃぎだす様子など、十代の昔と少しも変わっていなかった。薄墨色に剃り上げた眉の涼しげな形や、見ひらいた眼のあっけらかんとした明るさは以前のままで、どこかすっきりと垢抜けたものを感じさせ、ああ、やはり、零落してもお嬢様はお嬢様だと、可免吉を呆れさせた。

「まあ、多加ちゃん、そう、多加ちゃんよね」

と、応じつつ、可免吉は過ぎし日を回顧した。日本橋の両替商越前屋といえば、金座のすぐ近くにでんとした店を構え、苗字帯刀を許された数少ない豪商のひとつで、その華やかな暮らしぶりから、花街筋でも音に聞こえた上客であった。その家の長女の多加といえば、芸事

の好きな風変わりなお嬢様で、贅沢な身なりで、踊り、琴、三味線の師匠のもとに出没し、居合わせた芸妓や半玉たちの鼻白んだ、いわく言い難い恨みのこもった目線をさらったものである。そんな多加とは逆に、武家にゆかりの出自であったが故に、人目を忍ぶように、ことさら地味なつくりで出入りしていた可免もまた、却って目に立つ存在であった。二人は好一対で、葭町の師匠のところでは、この二人だけが素人娘だったこともあって、自然に仲良しになったのであるが、あれはまだご一新の前で、攘夷の牙城ともいうべき孝明天皇と、「イモ公方」と渾名されるほど料理遊びに夢中だった風変わりな十三代将軍家定公との御世であった。

可免の祖先は元々、分家旗本の松平康道様の家来であったとか。主家の長男であった松平康任様が、跡取りをなくした濱田藩の養子として三代藩主に迎えられたため、それに随行したのであるが、康任の度重なる不始末によって、康任が永蟄居の処分を受けたとき、その禄を離れ、江戸に舞い戻ったところ、世話をする人があって、西国に詳しいところを見込まれ、越前松平様の江戸屋敷に出入りするようになった。が、任せられたのは半ば間諜のような仕事であったという。濱田藩に縁があった例の者ということで、符牒めいた呼び名が濱田となり、そこから濱田と名乗るようになったのである。

濱田藩は銀山のある石見領と共に、関ケ原以降、長州藩から召し上げられた領地であった。よって外様の長州を監視しつつ、幕府領の石見にも目配りをするという特異な位置にあった。康任は幕府の実力者水野忠成と親しい間柄であったため、老中職を得て、相応の権勢を誇るようになったものの、藩財政は火の車であった。但馬出石藩仙石家の筆頭家老の仙石左京から六千両の賄賂を受け取ったことが露見して老中の座を追われたときも、藩士たちはむしろ、主の苦衷を察したほどである。藩主は無論、商人、農民の端まで藩の財政窮乏に胸を痛めていたほどであるから、窮余の策で、御用商人の会津屋と藩首脳部が結託して、竹島を舞台に密貿易を企んだことも、悪事とは思わぬ者が多かった。このとき隠密として幕府に調査報告をした間宮林蔵こそがお家の敵という認識であった。長州戦争では早々に長州勢に城を明け渡し、そのまま幕末を迎えていた。

信用の置ける隠密飛脚として、松下村塾の息のかかった要人の間などを行き来していた父に、共に意気投合して同志となっていた攘夷派の一味から、政略の一環として、「お前の娘に江戸の芸妓の素養を仕込んではどうか」との提案がなされた。それが可免の遊芸事始であった。そのための費用がどこから出ているのか、うっすらと想像はついたものの、使命感に燃える父を、ただただ誇らしく思い、近い将来、極秘情報の中継点として、父の手助けができることを何げに嬉しく感じ、胸を躍らせたものである。習い事のひとつひとつを、武士の真剣勝負になぞらえ、寡黙に精進したことが集中力を高めたのであろうか、少女の可免は居並ぶ先輩たちをごぼう抜きにして、またたくまに芸の腕を上げたのである。そこへ、父が任務途上で斃死するという事件が起きた。血塗れの遺骸を葬った悲嘆の極みで、閣に閉ざされた喪中にも、一点の温もりはあるものである。同情した人の推薦によって、母と二人、越前藩上屋敷のお女中として採用されたときは、涙越しに虹を見上げる想いがした。一度離れた身分階級というものに、切ない郷愁が可免にも母にもあったので、上流武家の風習や心構えというものを、ひとしおの感慨をもって、習い覚えたものである。意外なことに、そこでもまた、行儀見習いにきていた多加とばったり鉢合わせをすることになった。ある旗本に見初められた多加は、越前藩士の誰それの養女ということにして、武家に嫁ぐことになったという話であった。不思議な縁と訝る間もなく、三月もしないうちにある方面から、「可免を葭町の芸妓として忍ばせろ」という指示が下り、多加とはそれっきりになってしまった。

ほどなく多加も、件の縁談が壊れ、久次郎という番頭を婿に迎えたことが風の便りに聞こえてきた。ある時、両替商の集まった座敷に、新米芸妓として呼ばれていた可免吉の耳元で、姉芸者の一人が、「ほら、あの大人しそうな、ちょいといい男が越前屋の婿さんだよ」と、



ささやいたことがある。それやこれやのいきさつが走馬灯のように脳裏をめぐり、可免あらため芸妓可免吉は、いまこうして再会した多加の前で、ことさらに胸を張り、背筋を伸ばしていたかったのである。

と、その時、ぱらぱらと降りだした雨がみるみる本降りとなって、二人はごく自然に、近くの軒先に雨宿りする段取りとなった。

「とうとう降りこめられてしまったわね。ああ、でもなんて奇遇でしよう」と、多加はまん丸な目をくりくりさせた。少しもじもじして、大きく息を吸い、「あの、あのね、可免ちゃん、わたしんち、表通りの店をたたんで、ついそこの裏手で本屋を始めたところなの。よかったら寄っていってちょうだいな」と切り出した多加の、つと動く手の表情に、遠い昔、踊りの稽古中も気になって仕方がなかったのだが、なんともいえぬなまめかしい愛らしさが漂って、先天的に男好きのするお嬢様の魅力は健在のようだと、女の可免吉でさえ、血の騒ぐ心地がした。

可免吉が越前屋の逼塞した事情について精通していたように、多加のほうもどうやら、葭町一の名妓可免吉の消息に耳をそばだてていた模様である。亡き父の役目を引き継いでいた脱藩浪士と、ごく自然の成り行きで恋仲となり、可免吉もいったんは廃業し、めでたく祝言を上げ、慎ましい家に、弱っていた母親も呼び寄せ、せめてもの親孝行を果たしたつもりでいたところが、娘の仕合せを見届けて気がゆるんだのか、母は流行病に罹って帰らぬ人となった。その三回忌も待たずして、長崎に向かう船が沈み、夫も海の藻屑と化してしまった。泣こうにも泣くための涙も枯れ果て、茫然自失の状態が三ケ月も続いたであろうか。なんとかそこから立ち直れたのは、やはり昔から尊皇攘夷の理念に燃え、命を賭してきた男たちの力強い励ましがあったからである。とはいえ一人の肉親もなく、天涯孤独となった可免は、当時まだ二十九歳の女盛りであった。意を決して芸者可免吉として返り咲いたものの、その時点で既に、年増も年増、先に限りのある身であった。四十の坂が迫りつつあるいま、左褄をとり続けるには、ぎりぎりの崖っぷちといって過言ではなかった。多加はそんな可免吉に同情の念を抱いているようでもあり、互いに仕合わせとは言い切れぬ現在の身の上を慮ることで、一時の慰めを得たいようでもあった。

そこを鍵の手に曲がって奥まった路地へと、雨脚の弱まった隙を見はからって二人は走った。店構えの間口こそ、まずまずに見えたが、古びた軒先にそぐわない新しい木の看板には、確かに越前屋と墨書されており、それがいかにも達筆であることや、板のあまりに小ぶりなことが、華やかなりし昔日を知る人々の哀れをそそらずにはすむまいと、可免吉もつい目を伏せた。が、一歩暖簾をくぐると、ところ狭しと新旧の書物が積み上げられており、さすがと思わないでもなく、框の空いた所には、びっくりするほど上等の座布団が敷かれていたりする。すすめられるままに腰をおろすと、行儀の行き届いた丁稚がすぐに茶と乾いた手拭いを運んできた。女中はいないのだろうかと、見回しながら、濡れた髪や襟元をぬぐっていると、多加はいかにもばつが悪そうに打ち明けたものである。

「今の子ね、実は上から八番目の息子なの。奉公人はすべて暇を出して、番頭、手代はおろか、丁稚もいなくなっちゃったものだから。わたしはもともと台所仕事なんてできやしないし、賄いのお婆さんと上の娘たちが奥を切り盛りしてくれているわ。わたしも読み書きはなんとかできるから、在庫を調べて帳面をつけるくらいの手伝いはしているのよ。うちの人の考えで始めたことだけど、男の子たちも店に出て、家族総出で働いているの。世間の人はいいようにいわないと思うけど、こういうのも気が置けなくって、案外、楽しいものよ。可免ちゃんなら、わかってくれるわよね。もっとも、うちの人は外まわりでいろいろ苦労しているようだけどさ。『あんたが自分で決めたことだから、わたしは知―らない』て、いってやるの。さっきはわたしに向かって、『何もかも思うようにいかない』なんて愚痴るものだから、『そんな泣き言、いまさら聞きたくありません』といったら、『へええ、さようですかい』て、つむじを曲げて出ていっちゃったの、あはは」

ああ、それで、ご亭主の後を追って、家内のはしたない風体のまま、あんなところをうろついていたのかと、可免吉にもようやく合点がい

った。
「ところで多加ちゃん、いったい何人の子持ちなの」
「お腹の子が十三人目のはずだったけど、ひとり病で亡くしたから、もうすぐ十二人になる勘定よ。あたしったら、こんなふうに、年がら年中、重いおなかを抱えて暮らしてきたのよね、あはは」
「そりゃたいへんだ。こんなご時世じゃ・・・・。久次郎さんを婿さんに迎えなすったころは結構な全盛が続いていらしたのに・・・・。太政官札だの民部省札だの、わけのわからない官札がいっぱい飛び交って、両替屋さんはめちゃめちゃな目にあいなすったからね」
「そうなのよ。額面百両の太政官札が実際には金四〇両にしかならなかったもの。それでもうちはまだましなほうよ。うちの人が早くに見切りをつけて、できる限りお米に換えたりしていたから。質屋を始めたのも、処分しきれなかった小額の民部省札をなんとかするために、あの人が思いついたことなの。丁度二分銀の贋物がいっぱい出回って、みんな困っていたから、お札のほうがまだしも信用できるというので、運よく捌くことができたのよ。だけど、もう少し判断が遅れていたら、このところの官札の偽造騒ぎに巻き込まれて、すっかり破産していたにちがいないって、一家で胸をなでおろしているのよ」
それらの騒動を収拾するために大蔵省で悪戦苦闘しているのが民部省改正掛であり、その指揮をとっているのが澁澤榮一であることを可免吉は承知していた。伊藤博文がこの春、半年ぶりにアメリカ視察から戻ってくるや否や、即座に抜本的な改正案を建議し、それが新貨条例と呼ばれるものであることをも、可免吉は小耳にはさんでいたのである。彼らこそ可免吉にとって、最重要の常連客であった。彼らは茶屋料亭にただ遊びに来るのではない。伊藤博文などは俊輔と名のっていた壮士時代から、最も用心深く、可免吉を出入り口の番人に立てて、お銚子を運ぶ仲居にさえ近づくことを許さなかった。主たる目的が密談であったから、政治向きの議論に関しては、可免吉にも門前の小僧程度の知識は自然に備わっていた。それでも基礎教養に欠けるというのは惨めなもので、どれほど背伸びしようとも、渋澤たちの金融関係の話だけは、どうにも消化しきれずにいた。そもそも澁澤たちに固有の耳慣れない専門用語が、まるで異人さんの言葉のようで、つぶやき声を聞いているだけでも、大海を彷徨うような不安にかられた。これが、両替商という環境で育った多加であったらどうだろうと、ふと想像したことがある。その多加はいま、自分たちを見舞った政変の嵐にまるで無頓着で、台風かなんぞの自然災害にでも遇ったかのごとく、さっぱりと諦め、新しい日々を爽やかに生きている。その事実に、可免吉は強い衝撃を受けていた。深刻な話題を持ち出されても、眉を曇らせるどころか、どこふく風の上機嫌でいられる多加の逞しさに、なんとなく歯が立たず、可免吉は下手な同情を抱いた自分を恥じ、一方的な多加のお喋りに、大人しく相槌をうつのであった。
「あ、そう、そう。本当はね、身分違いだけど、是非にわたしをお嫁にもらいたいというお旗本があって、心配したお父っつぁんが越前松平のご家老様にお願いをして、行儀見習いに、奥座敷にまで入れていただいたのよ。あら、いやだ、わたしったら、忘れるところだった。そこで可免ちゃんに再会したのだったわよね、あはは。あーあ、あの頃が懐かしいなあ。お屋敷内にこっそり無花果の挿し木なんかしちゃってさ。可免ちゃんったら、高輪の下屋敷ではお庭をいじっても平気だったなんていうものだから・・・・。いつだったか、可免ちゃんがお稽古の折にもってきてくれたあの無花果、飛び切り美味しかったのだもの」
「ただただ、食いしん坊だったのよね、わたしたち。それで庭師のおじさんに、こっぴどく叱られちゃって。叱られる場面はいつも多加ちゃんといっしょだった気がするわ。お師匠様のところでも、そうだったし・・・・」
「あれからちょっとして、わたしの代わりに跡を継がせることにしていた妹が急死しちゃって・・・・。徳川様もあの通りでしょ。うちもお旗本衆とは敵味方の間柄になっちゃったから、縁談どころじゃなくなったの。父もがっくりきたのか、寝たきりになっちゃって、悲しむ暇さえありゃしなかった。今の亭主、妹の婿になるはずだったのだけど、もともとわたしに岡惚れだったらしくて、あっちにもこっちにも都合がいいからって一緒になったの。うちは特に素人にできる商売じゃないから、跡取りができないときは出来のいい奉公人を婿になおすのが代々の慣わしなのよ。もっともその商いも、今じゃ関係なくなっちゃったけどさ、あはは。可免ちゃんはいいわね、ちっとも変わらなくて。若いころよりきれいになったみたいよ」
皮肉ではなく、心底羨ましそうにいわれたのが、どこか無神経に響いたりもして、相変わらずのお嬢様ぶりに、可免吉は思わず苦笑した。
「葭町もたいへんなのよ。料亭なんか、新政府の方々に、散々飲み食いされた挙句、わけのわからない紙きれで勘定をすまされても、泣き寝入りするしかないだろう。きのうまでお金だったものがきょうは違うといわれ、きょうまでただの紙きれだったものにちょろりと字を書いて、こいつを今から金として取り扱えなんていわれても、そんなものじゃぁ、行商人から菜っ葉一枚買えやしないよ」
そこを我慢し、いわれるままに容認してきたからこそ当節は、もともと格上だった新橋、柳橋を追い越す勢いで、葭町が一層の隆盛を誇っているともいえたのである。つい非難がましい言葉を口にした可免吉は、自らの矛盾に、ふと後ろめたさを感じた。そもそも旧幕府筋の息のかかった遊び場は、新興勢力の人々にとって、まだまだ物騒で、羽を伸ばすどころではないという事情もある。伊藤博文を首魁とする一統が異常なほど葭町に入りびたるのも、その座敷に必ず可免吉を侍らせるのも、すべては過去の因縁によるものだった。そんな見えない糸の端が、複雑に絡まりあって、商家の多加の運命にまでつながっていようとは、この世間はなんという奇怪な入り組みようであろう。
「うちの人もあれでね、先見の明というのかしら、ほら、最近、藩札が禁止になったでしょ。その情報を何年も前からつかんでいたものだから、お父っつぁんの代に山のようにかかえていた越前松平様の藩札を、いち早く太政官札に換え、その上、先手を打って質屋に商売替えをしたってわけなの。ほら、幕府が勝海舟様の海軍操練所を見限ったとき、松平春嶽様が坂本竜馬様に、千両箱をお出しになって、それで尊皇派は持ちこたえたという噂、聞いたことがあるでしょう。あれはうちで調達させていただいたのよ。うちの古い先祖の小熊は元越前藩の勘定方の三男坊だったのが、上からの特命を受け、藩を抜けて越後屋さんに見習い奉公して、そこから暖簾を分けていただいたといういきさつがあったしね」
こともなげにいわれて可免吉は仰天した。それならば越前屋が金融関係の極秘情報を事前に掌握していたとしても不思議はない。維新政府こそ、討幕に至る過程で、この越前屋に大きな借りがあったのだから、その困窮に見て見ぬふりはできない道理であった。
「そんなだったら、何かもっと手はなかったのかしら」
思わずいう可免吉の言葉を多加はさらりと受け流した。
「お父っつぁんがいけなかったのよ。あの当時、うちの人が口を酸っぱくして勧めたのだけれど、越後屋さんにちゃんとついていけば、もっとなんとかなっていたと思うの」
しかし多加には世を恨む感情など微塵もないらしく、育ちが良いとはこういうのをいうのだろうかと、可免吉は尊王攘夷派に与した一人として、罪滅ぼしのつもりで、じっと多加の言葉に耳を傾けるのであった。
「今年になってやっと新貨条例というのができて、金貨を根本に据えることに決まったから、この混乱もじきにおさまるだろうと、さっきもうちの人がいっていたわ」
「伊藤博文様がわざわざアメリカまでいらしたのは、そのための調査だったそうよ」
「うちの人がいうには、大蔵省に凄い切れ者がいらして、その方の采配だから間違いないだろうって。でもその人、大政奉還の最中に、徳川昭武様に随行してパリーの万国博覧会を見物していらしたというから、呆れたのんき者だわよねえ、あはは」
「多加ちゃん、それって、もしかして渋澤様のことかしら。留学帰りの方たちは大久保利通様に嫌われて、思うように動けないご様子だけど・・・・。その大久保様も、今度の大掛かりな岩倉様の使節団に加

わって、実際に西洋の国々をご覧になれば、変わらざるを得ないだろうと、伊藤様たちは期待していらっしゃるのだけど」

「あ、あのねぇ、可免ちゃん、そういう話、わたしじゃなく、うちの人にしてやってもらえないかしら」

と、多加はまっすぐに可免吉の目を見据え、可免吉の膝の手に自分の熱い手を重ねた。本人も無意識の動作であったらしく、はっとして視線を外すと、あわてて手を引き、ややのびた指の爪が気になるのか、反射的に口元で噛もうとした。そんな幼児のような仕種をさらに恥じたらしく、ほんのり朱を刷いた顔を、袂でぱたぱたと扇ぎ、ほてりを鎮める多加の様子が、なんともいえずかわいらしく、花柳界に身を置けばどれほどの名花となっていただろうと、他人事ながら無念な気のする可免吉であった。子を宿して腹を突き出し、身だしなみの崩れた多加の現在の風情と、いましがたの突飛な空想との落差に、可免吉は思わず目をしばたいた。

「あたし、そんなこと、可免ちゃんに頼むのは無理だって、うちの人にはちゃんと断ったのよ。だけど、『今後、世の中がどんな風に動いていくのか、お前の古い知り合いの可免吉姐さんなら、いろいろご存知なんじゃないかい』て・・・・。あ、あの、もちろん、お座敷で聞いたことは絶対、外に洩らしちゃいけないって、それくらいのことはあたしだって承知しているわ。でも、でもね、可免ちゃん、そんな重大な秘密というのじゃなくって、なんとなくの雰囲気でいいから、知れたらいいのにって・・・・。うちの人も切羽詰まって、本音は不安でいっぱいだと思うのよ。『どちらに向かって船を漕げばいいか、それさえ判断できたらなあ』て、眉間に縦皺を寄せて、遠くを眺める様子がなんだか可哀想なのよ」

そうか、それでわざわざ自分を呼びとめ、家にまで招き入れたのかと、可免吉の心の底にわだかまっていた砂粒のような疑念がするりと氷解した。と同時に、可免吉の胸の奥から、生温かい、それでいてどこかわびしいような涙の匂いがこみあげてきた。歳月は非情だ。つくづくそう思った。しんみりした多加の語調は以前にはなかったものだけに、生きる辛さがにじんでいるように感じられたのである。

「さっきの渋澤なんとかという方のことも、うちの人、すごく知りたがっていたわ。両替商の組合から抜けたことで、いろんな情報がさっぱり入ってこなくなったのよ。それでもって、うちの人ったら、『越前屋は早まったかもしれない』なんていうものだから、『後悔先に立たずです』といってやったのよ。そしたら喧嘩になっちゃって、あはは・・・・」

ご亭主の見識を幾分自慢したそうな多加の口ぶりと、しっかりと内助の功に役立っている様子に、やれやれ、夫婦喧嘩は犬も喰わないとはよくぞいったものだと、可免吉はかったるい安堵を覚えた。多加への親しみが旧に倍してもどってきた分、頼まれごとにわざわざ、否とも応とも明らかにする必要すらなく、からかい半分、わざと本筋を逸らしてみた。

「今度は両といわずに円といえだなんて、妙なお達しを出された所為で、下々の細かなへそくりさえ隠しておけなくなったでしょ。夫婦喧嘩の種は増えるし、猫も杓子も大騒ぎね」

「うちの人もそんなふうに振り回されるのに嫌気がさして、両替町から出て、ここでお米と質草を交換するだけの地道な商売に切り変えたのだけど・・・・。でもご覧の通りで、生活の道を断たれたお侍衆が持ち込む本でいっぱいになっちゃったの。だったらいっそ本屋でもと・・・・。うちの人ったら、これからの時代を考えると、西洋の書物なんかも扱う道をつけたいと、築地の異人さんの居留地まで足をのばしたりしているのよ。けど、雲をつかむような話で、途方に暮れているらしいのよ」

剣呑になりかねない話題を、危なげのない世間一般の面白おかしい噂話に換骨奪胎して敢えて逸脱させるのも接客術のひとつである。玄人とはこういうものかと、自らを観念する可免吉であったが、多加があまりに覿面にその掌にのってしまうので、いつのまにか身についた自分の客あしらいの習性を、ふと醜いもののように感じた。その居心地の悪さをふっきろうとして、可免吉は知らぬ間に警戒水域を越えていた。多加夫婦のために一肌脱ぎたいという、やみがたい衝動にかられていたのである。

「だったら多加ちゃん、築地なんて半端な所で足をとめないで、いっそ、横浜までいらっしゃいな。もう一年もしないうちに、新橋から横浜まで陸蒸気で通えるようになるわよ」

「乗ってみたいわぁ、その陸蒸気というのに。どんな乗り物かしら。わくわくするわねぇ」

小半刻ほどもそんな話をして、ころころと嬉しげに笑う多加を尻目に、雨が小降りになったところで屋号入りの番傘を借り、可免吉はようやく越前屋を後にした。

女どうしがご政道向きの話をするようになっては世もお仕舞いさと、可免吉はつんと鼻っ柱を天に向けた。座敷では理に勝ったことを口にするのはご法度であった。男たちの緊張をほぐし、自信を取り戻してやるのが自分たちの役目というものであった。だからといって、政情に疎くてはとうてい勤まらない。その辺りの匙加減がめっぽう難しいのが夜の社交場というものである。だからこそ自分のような大年増が却って重宝され、今日に至るまで、名妓の誉れ高く生きのびてこられたのだと、そんな自負と弁えが可免吉の胸にようやく甦った頃、雨がやんだ。

女たちが暢気に、紅白粉や帯、着物の話題で嬌声を放っていられるような時代こそが、本当の良き世といえるのではないだろうか。とはいうものの、身のまわりから血腥い戦の粉塵が遠のいたのは、ありがたいことといわねばならない。名もなき親子、そして夫婦ではあったが、自分たちもまた、新しい日本国の建設に一役買ったのだという充足感が、家族をなくした孤独な可免吉の心を支えていた。諦めようにも諦めきれないことを納得するにはそうするしかなかったのだが、翻ってみるに、多加の恬淡ぶりには、そこはかとない敗北感を覚えずにはおれなかった。なぜだろう。武家と商人の根本的な感性の違いであろうか。自分のような女でも、武士の理想と気骨に染め上げられていればこそ、政財界の重鎮を贔屓筋として引き寄せることができたのだと、そこはしっかりと見定めている可免吉であった。多加ちゃんとちがって、あたしなんか、恩恵を受けてきたほうじゃないか・・・・と、やりきれない思いに胸を詰まらせるのであった。

幕末の動乱で夫が一命を落とした直後に元号が改まり、明治となってすでに四年がたつ。あの人が今日まで生きていれば、松下村塾の派閥に連なってどんな出世をしていたやも知れず、自分だって伊藤博文や木戸孝允の奥方のように、元芸者の出世頭として、お歴々の正夫人に名を連ねていたかもしれないのだ。と、紙一重で弄ばれる女の運命を、つくづく儚くかつ滑稽なものに感じ、いっそ朗らかに世をわたろうと、ひょいと水溜りを飛び越える可免吉であった。

## 二　掛取り

偶然とは重なるものである。その夜の座敷で可免吉が得意の木遣で一同をわかせた後、帳場に挨拶に立ち寄ろうとするのと入れ違いに、玄関側の暖簾を押して出て行った男の姿にかすかな見覚えがあった。あれ、まあ、あれは、ひょっとして、多加ちゃんのご亭主、久次郎さんじゃなかったかしら。頭こそ散切りに変わっていたものの、暖簾を上げるとき左手を右の袂に添える仕種など、血のつながらない先代を敢えて模倣しているように見え、それがくっきりと印象にのこっている。いったん気になりだすと落ち着かず、女将の寿々に真偽をたしかめずにはおれなかった。

「たしかに両替町にいらした越前屋さんだよ。こういっちゃなんだけど、あの旦那、昔の羽振りを思うと、気の毒でねぇ」

「それにしても、身なりもよいようだし、まだここに出入りするだけの甲斐性がのこっていらしたのですねぇ。多加ちゃんも、たいしたものだわ。旦那にはきちんとさせて・・・・」

と、可免吉に悪気はなく、むしろ多加の身になって喜んだつもりがとんだ藪蛇となった。

「そうだ、越前屋さんのご内儀は可免吉姐さんのお知り合いだったよ

ねえ。だったらひとつ、頼まれておくれでないかい。いえね、越前屋さんが表通りの店をたたんじまった折、ここの付けもきれいに清算してくだすったくらいだから、信用しないってわけじゃないのだよ。大昔からの義理もあることだし、人情ってものがあるからねぇ。いまさら掌を返すように邪険にはできなくってさ。『いいから、いいから、お勘定のご心配などなさらずに・・・・』と、あたしもつい、いい恰好を見せちまったのさ。あの大人しい旦那、ご内儀に気兼ねしてか、芸者をあげるわけでもなし、顔馴染みの仲居に酌をさせても深みにはまるわけでもなし、よんどころないお知り合いの一人、二人と連れ立って、ひっそりとお銚子数本をあける程度だから、ちまちまと目くじらをたてるのは、こちとらが恥ずかしくていけないよ。でもねえ、節季が二度も過ぎれば、麓も積もれば山の喩え通り、そろそろ黙っているわけにもいかなくなっちまってさ。どれくらいのお暮らしむきかをたしかめもせず、お店のほうへ、いきなり掛取りをうかがわせてよいものかどうか、思案投げ首でござんすよ。ひとつ力になっておくれな」

可免吉のほうから女将に客筋の話をもちかけるなど、先方にしてみれば鴨が葱をくわえて飛び込んだようなものであった。人にものを頼まれればいやとはいえない可免吉の性分とこの千載一遇の好機を、みすみす見逃すような寿々ではない。一瞬の迂闊さがあっても、この種の客商売はつとまらない。臨機応変の付け馬など日常茶飯事のせちがらい飲食業界で、人情女将の寿々の堪忍もこの辺りが限度だったのであろう。情に欠けても流されても立ち行かないのが浮世である。恨みをのこさない上手な取り立てで、人の浮き沈みの激しい波をかぶらないよう、うまく漕ぎわたらねばならない。この名女将の寿々に、可免吉は娘時代からずいぶんと世話になり、可愛がってもらったものである。小娘の足で高輪から日本橋まで、一日がかりで稽古事に通っていた折も、築地に買出しに出る料亭所有の猪牙舟に毎日のように便乗させてもらった。そもそも彼女の口利きと肩入れ、それになにより折々の助言がなくば、特異な序列やしきたりがうるさく支配するこの世界に、潜り込むことすらできなかったであろう。

そういう事情がなくとも、芸妓の身ともなれば、日ごろ出入りさせてもらっている茶屋料亭からの頼まれ事とあらば、無碍にはできない道理である。しかし、表面では快く引き受けながら、陰でこっそり舌を出し、平然と手を抜いておいて、後日、さも尽力したように取り繕って言い訳を並べ立てるような狡い芸者太鼓持ちもいた。その種の不実やいい加減さが不快でならない可免吉であった。それにこのとき、不思議なことに、そもそも微塵も迷惑に感じていなかった。多加夫婦の信用を維持することが何故か、人間社会の損得勘定を超越した功徳のように感じられたのである。常日頃、成田山のお講などで聞く法話が、知らず知らずのうちに、よるべない可免吉の標となっていたのであろうか。人としての功徳を積むことのほうが、あさましく金品や名誉を追うことより、どれほど大きな力の蓄積となることか。可免吉にはその確かな手応えがあった。人の信頼という石垣がいまの自分という城を支えてくれていると、つくづく思わないではいられなかった。

資金繰りの苦しい折から、女将さんもさぞお困りだろう。久次郎さんにしたってこの難儀な時代に、入り婿の身で、どれほど艱難辛苦をなめていらしたことか。ささやかな憂さ晴らしくらい、大目にみてあげなくては・・・・と、久次郎が肩身の狭い思いをしながら飲む酒の苦さまで思いやるほど、可免吉には余裕があった。

幸い借りた傘を返すという口実もあったので、いささかも苦にすることなく、いやそれどころかむしろ嬉々として、可免吉は明日もう一度、多加を訪ねてみようと心に決めた。昼間の大降りですっかり雲の消し飛んだ藍の空に、華奢な三日月が白く冴えわたっていた。可免吉は多加との友情の行方を、その涼やかな月に占ってみたい心境であった。

丁度居合わせた久次郎が、「そんな店先ではなく、どうか奥へお通りなすって」というので、可免吉は遠慮なく奥の、風のわたる縁側近くに座らせてもらった。すると、はっと息を呑むほど楚々とした美しさを湛えた娘の春というのが現れ、垢抜けた身ごなしで、可免吉の膝



元に湯呑をすすめた。御殿勤めを経験した母親の躾の成果であろうか、あるいはこの娘自身、どこかのお屋敷へ、既に奉公にあがった経験があるのではなかろうか。春の立ち居にはまったく隙がなく、それが可免吉に、かえってある種の危うさを感じさせた。いかに美しくとも、こういう娘は花柳界ではやっていけない、むしろ悲劇の種になりかねないと、可免吉は経験的に直感するのであった。そこへ久次郎が何を思ってか、気まじめな額を寄せてささやいた。

「可免吉姐さん、ひょっとして御用というのは女房ではなく、あたしのほうにおありでは」

それが昨日の多加の依頼に呼応しての発言であるのか、それとも夕べの料亭での一件を久次郎のほうでも、すばしっこく気付いての話であるのか、可免吉には判断がつきかねた。物静かな男であるが、目端に一瞬鋭い光がよぎり、即座に機先を制するあたり、これはなかなか手強い御仁だと、可免吉は改めて気を引き締めた。隣でけだるそうに団扇を動かしている多加の手前もあって、用向きのことをどう切り出してよいかわからず、これは案外難しいお使いであったと、可免吉は楽観的に安請け合いしてしまった自分の迂闊さに、苦笑しないわけにはいかなかった。

「さっきのお嬢ちゃん、お春ちゃんでしたっけ、あまりにきれいで見惚れてしまいました。先がお楽しみですねえ」

と、さしさわりのないほうに水を向けると、久次郎のほうも、

「女房には話さなかったのですが、先日もさるご大家の若様があの娘をお見初めくだすって、お声をかけていただいたのですよ。まだ幼すぎますのでと、丁重にお断り申し上げたのですが・・・・」

と応じ、

「あれ、それは何の話ですか」

と、多加が気色ばむところへ飛脚便が届いたりして、ざわついているうちに、あの話もこの話もうやむやになって、可免吉は機敏に問いかける久次郎の掌にあっさりのせられてしまった。

「それはそうと姐さん、郵便というのはどんな按配でしょうか。ご府内と同じ料金で、京、大阪まで配達してくれると聞いたのですが、途中でなくなっちまう心配はないものでござんすかねえ」

「さあ、どうなんでしょう。切手というのを買って封書の肩に貼るそうですけど、それもなんだか面倒で・・・・。新しいことがお好きなお客様から、あたしも書簡をいただいておっかなびっくりでしたよ。それが筆ではなく、ペンというもので書かれた細い線の文字でしょう。どうにも変な具合で、ありがたみが薄い気がして・・・・。『本当にちゃんと届くものかどうか、どうでもいいお前のところで実験してみたのだよ』と、そのお客様、遊び半分で、わたしをおからかいだったのですけどね」

「それじゃあ可免ちゃん、あたしたちも一度それで手紙のやりとりをしてみましょうよ」

と、あどけなくいう多加を久次郎がたしなめた。

「同じ日本橋のうちで莫迦げたことをおいいでないよ。お前さんとちがって、可免吉姐さんはお忙しいのだよ。郵便のことは聞き知ってはいても、商売人たちは不安がって、そうそう利用する者はおりませんや。むしろこのところ、旧来の飛脚のほうが、以前よりずっと繁くなっているように見えますがねぇ」

「東京、京、大阪だけじゃ、ものの役にはたつまいと、新政府のお役人たちも話しておられました。それでも、この方法が全国に広がれば違ってくると、見通していらっしゃるのですよ。西洋じゃ、外国の相手にまで、自分の国の切手を貼るだけでやりとりできるそうですよ」

「この日本国も、南は薩摩、北は蝦夷まで、諸大名を差し置いて、できたての太政官府が直轄しようというのですから、情報や文物の行き交いは激しさを増すいっぽうですよ。たしかにご改革が必要かもしれませんねぇ」

と、久次郎のそんな講釈を聞き流しつつ、可免吉は肝腎のことに触れないまま、八つの鐘を機に席を立った。その夜は特に大事な座敷が入っており、そろそろ髪結いにかからなければならなかったのである。

あのご亭主なら大丈夫、他人は興味本位で好き勝手に悪い想像をめ

ぐらすが、越前屋もそれほど困窮しているわけではなさそうだと、可免吉は正直な感想をありのまま、女将の寿々に伝えることにした。

「すると何かい、可免さんはひと言もうちの勘定のことには触れなかった、てのかい。そりゃ、ただごとじゃないねぇ。うちの者がまだ表に水を打っている刻限だったからねぇ。若い手代さんが、いえね、手代さんかと思いきや、実は息子さんだったのだけど、十四、五の若い子が飛び込んできて、親父がいろいろお世話になりましてというじゃないか。端数は利子としてご清算いただけば結構でございますと、行き届いた口上でね。驚いたよ、まったく。いくら可免吉姐さんの手際といったって、ゆんべの今日だもの」

寿々は夏場の空火鉢に寄りかかり、煙草をくゆらしていたのだが、威勢よく五徳に煙管を打ちつけていったものである。まだ陽の高いうちだったというから、久次郎は可免吉を見送ってすぐ、息子をひと走りさせたものと見える。さすがは元両替商というべきか、信用第一で、督促を受ける前に先手をと考えたのであろうが、盆前だというのに、まとまった金子の急な算段は楽ではなかった筈である。そう思うにつけても、女房の友人にすぎない芸者の自分にさえ丁重さを崩さず、控えめに振舞っていた久次郎の徹底した態度に却って、何かこう、頭抜けた要素を感じ、彼ら夫婦との縁がこのままでは終わらないような予感が頻りにした。どうにかして応援する手だてはないものかと、暇さえあれば思案をめぐらしている自分にどきりとして、心というものの不可思議な作用に、戸惑い呆れる可免吉であった。

## 三　秘密

その夜の客は伊藤博文と、秘書としていつも随行している金子堅太郎に、井上馨らを加えたいつもの五、六人で、いずれも退庁したその足で駆けつけたものとみえ、めっぽう早い来着であった。例によって例のごとく、可免吉ひとりをのこし、一切の出入りを禁じ、離れを借り切っての談合であった。この日も、その年の暮れから諸外国を歴訪することになっている岩倉使節団の、随員に関する話題が主で、長期に留守にする間の手当を、仲間内でよほど綿密に打ち合わせておく必要があったようである。この連中は何事も、わざと遊びにかこつけて、内密に行おうと神経を尖らしているのであった。伊藤博文の遊び好き、女好きの噂は、このような戦術戦略から意図的に流されたものであるらしい。「あいつは昼行灯と呼ばれた忠臣蔵の大石倉之助を模倣しているつもりなのさ」と、井上馨が笑って教えてくれた。「俺がお前にそういったことを伊藤に悟られるなよ」と、囁く井上を伊藤が見咎め、「おい、こら、可免吉に手をだすな。可免はおれだけの女だ」というのを聞いて、可免吉は俄かに、躰の芯がざわめいて華やぐ心地がした。それがたとえ、可免吉には極秘情報をにぎられているから、他の男の女にするわけにはいかないというだけの意味にすぎないとしても、こういう世界で、躰のやりとりよりもはるかに高次元で、男と女が信義を交わすという契りの重さが、誉れ高い金字塔のように思われたからである。

「先生、井上さんにかぎって浮気はあり得ませんよ。武子夫人とは、まだ新婚ほやほやですからね」

と金子が伊藤にいうと、柄にもなく井上は照れてみせた。

「いやいや、もうかれこれ二年になる。互いに飽きてきた頃だよ」

「大人しく判事の中井弘のご内儀として暮らしていたものを、横恋慕したお前が強引に別れさせて結婚したのだから、そんな不届きなことをいうと罰があたるぞ」

そうたしなめる伊藤に井上は待ってましたとばかり、女房自慢を始めた。

「なにせ、あれは好奇心の旺盛な女でね。今度の岩倉使節団に女子の留学生が五人も混ざっていると知って、羨ましくて仕方がないらしい。自分も混ざりたいとせがまれて往生したよ」

「武子夫人には欧米女性の積極さに通じるものがあるからなあ。あの才媛さで、西欧を見てきてもらいたいと、こちらからお願いしたいくらいだよ。あのようなご夫人が異国との付き合いに、是が非でも必要になってくる。聞太よ、お前自身、そういって、元の亭主を説得して、無理矢理譲りうけたのだろう」

聞太というのは井上馨の昔の名前である。六つ年下の伊藤も利助から俊輔に、さらに博文と名前を変えている。井上は瀕死の重傷を負ったところを伊藤に助けられた。身内ですら見限りかねないほどの深傷を伊藤は諦めずに連れ帰り、その甲斐あって蘇生したのだ。

「武子を欧米流の社交界を作るための人材にという目論見がなかったといえば嘘になる」

「大久保夫人も武子夫人くらい外に目が向くとよいのだが・・・・」

「二人の息子の留学に心を痛めていると聞いたが、やはりそうか」

「何もこんな幼い息子たちを知らぬ他国へやらなくてもと、泣きの涙というところらしい」

「何歳だ」

「十三と十一だそうだ」

「たしかに早すぎる気がするな。母親として反対する気持ちはよくわかる」

「いやいや言葉を習得する上では、もっと早くてもよいくらいだ。女子の津田梅子などはまだ九つだと聞いている。女子留学生は結局、十六歳と十一歳が二人ずつになった」

そんな幼い女の子たちが政府高官と共に海をわたるのかと、可免吉は天が割れるほどの衝撃を受けた。

「おいおい、可免吉が目を白黒させているぞ」

「なに、驚くにはあたらないさ。なあ、可免吉よ、初めて西洋にわたった日本の女は芸者だったのだよ。幕府が瓦解する直前のパリーの万国博覧会に、清水卯三郎という男が柳橋の芸者を連れていった」

またひとつ、可免吉の内部で何かがことりと崩れる音がした。これからいったいどんな世の中になるのだろう。その中で女はどういう生き方をするのだろう。それは女にとって、仕合せなことなのか、それとも新たな苦労が増えるだけなのか、あるいはその両方なのか、また、そこに自分のような女はどうかかわっていけばよいのか、いや、一切かかわることなど出来ずに、傍観するだけで朽ちていくしかないのだろうか。流れからただ取り残されるのは、やはり嫌だと、可免吉は流木にでもしがみつきたい気分であった。そんな具合に胸が揺れている間に宴席の話題は他に移っていた。可免吉がはっと我に返ったのは、自分の名前が飛び出したからである。

「伊藤はやはり、あれが気になっているのか」

「そうではない、ともいい切れぬ」

「可免吉のほかに誰が知っている」

「今上陛下以外では西園寺だけだ」

「西園寺はなぜ知った」

「西園寺に、塙暗殺事件の首謀者は誰かと、陛下からご下問があった。その者は如何にして朕の心痛を知りえたのかとも訊かれたそうだ。その話が洩れてきたので、わしが自ら、西園寺に打ち明けたのだ」

「大丈夫か」

「大丈夫だ。あの男は、わしが死ぬまで黙っていると誓った」

可免吉の夫も、その昔、長州の同志たちが示し合わせて、御殿山に建設中の英国公使館を焼き打ちするというので、伊藤俊輔すなわち現在の博文らを土蔵相模という旅館まで案内したことがあった。伊藤については、亡き父も、仲間たちとよく噂していたものである。松下村塾の時代には百姓出身の伊藤はまだ利助と呼ばれていて、身分が低いため座敷にも入らず、軒先で講義を聞いていたそうである。その伊藤が一躍重要人物となり得たのは、伊藤が国学者塙忠宝暗殺の首謀者となったからだと結論づけられるのが常であった。当時は怖い話として、漠然と聞き流していた可免吉であったが、今頃になって、伊藤という人間に近しく接してみると、あの折の皆の評価は根本的に間違っていたと、声を大にしていいたくなる。緻密さにおいて、そして大胆さにおいて、誰がこの伊藤に勝ることができるであろう。何より先を読む深さがずば抜けている。こういう場所でふとすれ違う下足番の私生活上の憂い顔さえ見逃さず、懇ろに声をかけ、細かく気を配ることを忘

れないのを見ると、出来る男とは日常生活の隅々まで、こうも違うものかと、ほとほと感心させられる。

残念ながら、父にしろ夫にしろ、同じように尊皇攘夷の旗を掲げていたように見えるが、伊藤には及ぶべくもなかったのだと、認めざるを得なかった。女を包む男の気配というものがあって、四十代の伊藤の近くに身を置いていると、父よりも夫よりも濃密なそれに、ふと酔い心地になり、ひとり寝の無聊を癒されることさえあった。そんな可免吉の心の秘密に、以心伝心、伊藤が機敏に反応して、「俺の女」とまで表現したとすれば、人の心を見抜く油断ならない男ということになる。だがそれは、いわば、女性に対する伊藤に特有の、繊細な思いやりというものであろう。井上たちもそこの呼吸はよく心得ているらしく、「伊藤は据え膳を食いすぎる」と揶揄しつつも、やっかみの気配はいささかもなかった。むしろ女に接すべき態度を伊藤から学んでいるように見えたほどだ。伊藤が馬関の芸者であった梅子を本妻になおしたいきさつについても、見事な手際というほかなかった。賢い前妻が自ら身をひいたといわれているが、伊藤があくまでも前妻の名誉を傷つけないよう温かい配慮をしたからこそ、そういう評価となったのである。可免吉はそこに、伊藤の人間としての底力を感じていた。心移りを正当化するために、前の女を誹謗する男が世の大半である。然るに伊藤は男女の醜聞となりかねないこともすべて美談にして収めてしまう。伊藤と関係をもったという女はこの葭町だけでも数しれないが、それで女が泣いたという話はついぞ、聞いたことがなかった。お茶をひくことの多い若い妓が朋輩に冷たくあしらわれているのを見かね、情けをかけた例もあれば、貧しい家族を養っている気の毒な妓に、後ほど金一封を梅子夫人から届けさせる口実に、一夜を過ごした例などもあった。人を助けるにしても、相手が物乞いの惨めさを味わうことのないよう、正当な報酬として、胸を張って受け取れるよう配慮してやることを忘れないのであった。戸外に漂うただならぬ危険な気配を察知して、護衛を呼び寄せるまでの時間稼ぎに、女と寝たふりを決め込んだこともあるが、そういう時でさえ、相方の立場を思いやって、「ぞっこん惚れた」と、その女の周囲に、わざと吹聴したりする。強い相手には厳しくとも、女には優しい伊藤のような男こそ、男の中の男ではないかと、可免吉は主張したいのである。

だが、件の暗殺事件は、今後の伊藤にとって、いや欧米列国に並び立とうとする今の日本国にとって、致命的な醜聞になりかねなかった。長州閥の留学体験組は危機意識を募らせ、ここで改めて徹底的な緘口令を敷き、結束を強めようとしているのであった。

「いっそ堂々と表沙汰にしてはまずいのか」

そんな長閑な御尽に、伊藤は何度も口を酸っぱくして同じ説明を繰り返した。

「まずいに決まっているではないか。それが陛下のご意向でもある。いまここで話題にのぼることが一番いかん。万世一系王権神授の絶対性に一点の曇りもあってはならんのだ。それがたとえ今上陛下にとって有利な方向の主張であっても、正統性云々の議論が俎上にのぼること自体、疑念を胚胎させる温床となりかねない。決起の折も、そのように確認したではないか。状況はいまだ、あの頃と少しも変わっておらんのだ。楽天的に考えるのは情勢認識が甘いぞ。いまはとりわけ国家統一の核を、神聖かつ不可侵のものとしておかねばならん時だ。王権のゆらぎ即ち内紛の素因だ。朝鮮王朝などの前例が身近にあるではないか。朝鮮国の疲弊の最大原因は王権争いだ。わが国において、天皇の正統性を云々する学問など存在してはならんのだ。無論、永久にとはいわんが、遠い未来はともかくとして、現段階では断固禁忌とするのが上策だ」

「欧米の連中の目指す思想方向と逆な気がするが、その点はどうだ」

「わが国の現段階をどう分析するかによって答えが違ってくる。イギリスを見ろ。封建諸国に分散していた富を絶対王政によって国家的な規模で集中させ、強力な軍事力を培って海外に進出し、富を激増させたではないか。後になって初めてその富によって近代のブルジョワジー、つまり商人どもが成長し、デモクラシーの土壌を形成したのだ。デモクラシーは経済でいうと、国の富を民間に分散させることにほか



ならん。その分散が民間を活性化させ、多様な分野で近代産業を開花させるのだ。だが鎖国で遅れをとったわが国はいま、誰が何といおうと、分散ではなく、集中しなければならん時だ」

「福澤諭吉はどうする。あの男は、この国にデモクラシーを宣伝するつもりだ」

「あいつはどちらかというと義士というより商人気質だ。近代産業の礎を築こうとして、粉骨砕身の努力をしている貴重な存在だ。いまのところ益とはなっても害にはならんよ。だが、殖産興業の埒外で政権にかかわってこられると、大衝突もあり得るな」

「備えなくていいのか」

「近代化の推進力をいまの状況で敵視してどうする。開明派はまだまだ少ないからな。当面はあいつも大切な同志だ」

「来春、『学問ノススメ』という著書を出版するそうだ。おそらく危険思想もふくまれるであろうと懸念されている」

「アメリカの独立宣言に盛り込まれた人権思想を踏襲し、紹介するつもりのようだ」

「天は人の上に人をつくらずという、あれか」

「それだ」

「平等論はわが国にとって両刃の剣だ」

「だからこそ先手を打ったのだ。一昨年の暮れに民部省改正掛の渋沢栄一が大隈重信に出してきた戸籍平等化案が頓挫していたのを、去年の春に戸籍編成例目として大蔵省から太政官に提出させた。それを大木喬任ら、地方官どもが反対しおって。今年の四月にやっと戸籍法制定にこぎつけたものの、旧幕臣の杉浦譲らが穢多非人の身分を温存し、改革を先送りにしてしまった。その結果、穢多非人という身分に付随する無税地帯を大量にのこしてしまったではないか」

「そうだな。不合理な身分差別があなたにもこなたにも例外や特権を生む。徴税だけではない。徴兵制の施行にもよくない影響が出るにちがいない」

「しかも、欧米列強から賤民制廃止の要求をつきつけられるという屈辱的なおまけがついてしまった。腸が煮えくりかえる思いだ」

「新しい解放令公布の段取りは順調か」

「この八月の末にようやく実施にこぎつけた。しかし、諸外国の圧力に屈したような印象があって、こちらとしては不愉快きわまりない。干渉を受けて譲歩したかのごとく見られるのが片腹痛い」

「癪だが、確かに遅きに失したな」

「われらの見識に泥を塗られたようなものだ」

「かろうじて福澤の出版に先んじたのは僥倖というべきか」

「あいつの人権論は地租改正令の後押しになるよ」

「身分を平等にするということは課税をはじめ、義務も平等にするということだからな」

「言論の徒はそこに気付いておらん。江藤晋平なども痛し痒しだろうな」

「最大の問題はだな・・・・」

と、伊藤は腕組を解き、身を乗り出した。

「江藤より西郷だ。それに福澤の思想の中で最も面倒なのは脱亜論だ。平等論を正当化するあまり、民衆が福澤を神格化し、やつの亜細亜蔑視までもが影響力をもつと厄介なことになる。欧化思想に悪乗りして、わが国も植民地を持つべきだと主張する輩が勢いを得るかもしれない。それでは欧米列強の黄禍論に油を注ぐことになりかねない。いまは黄色人種の亜細亜全体が結束しなければならん時だよ。亜細亜全土の文明開化を急がねば、わが国一国で白人世界に対抗していくのはとうてい不可能だ。士族救済しか頭にない西郷らの周辺では、すでに征韓論が持ち上がっている」

「連中は欧米とわが国の落差がどれほどのものか、皆目わかっておらんからな」

「福澤にはそのような錯誤はなかろう」

「危険なのは、欧米は優れ亜細亜は劣ると、単純に結論づけてしまうことだ。英国が印度や清国を餌食にしたように、そうされて然るべき劣悪さが亜細亜諸国にはあると考えるのを、わしは妥当とは思わん。

そういう考えを是とするなら、わが日本国も例外ではない。開化のためにどうぞわが国も植民地にしてくださいと、わが領土を差し出すようなものではないか。文明において亜細亜が劣るように見えても、決して劣るといってしまってはならんのだ。一刻も早く欧化を進め、科学技術で追いつくと同時に、他方では、どんな分野でもよいから、こっちの優れた要素を発掘して、先方にそれを認めさせなくてはならんとわしは思うておる。亜細亜の諸民族を尊重に値するものとして、敬意を払わせるよう仕向けねば、条約その他の差別を撤回させることなど、とうていできまいよ。そのような優れた要素は必ず存在するとわしは確信しておる。工芸であれ、芸能であれ、進取の気概と両輪をなすわれらが伝統の奥行きにも、誇りをもって対すべきではないのか。考えてもみろ。キリスト教がわずか二千年であるのに比べ、仏教や道教は五、六千年の歴史をもっておる。その深甚な思想が欧米に劣るはずがないではないか。わが国まで欧米列強のように亜細亜を侵食の対象とのみ、捉えてしまうことは、秀吉の時代の失策を繰り返すことでしかない。英国はわが国の維新前に既に方針を変え、軍事力を必要としない通商相手としてこの国と接することにした。わが国が亜細亜を主導するのはかまわんし、そうすべきだと思うが、それはあくまでも同胞として育て、大同団結をもって、欧米に対抗できる勢力に育てるのが目的であり、その大儀名分を明確にしておかねば抵抗勢力を生むだけになってしまうぞ。ゆめゆめ脱亜論の尻馬に乗ってはならん」

「大儀名分とはいっておるのだ、おぬしは。わしのいわんとするところが少しもわかっておらんぞ。欧米列強内部においてさえ、植民地政策に反省が起きているというのに、わざわざ後塵を拝する必要がどこにある。植民地を維持するのにどれほどの軍費を要するのかわかっとるのか。現地の抵抗勢力を押さえつけるために多くの駐屯兵を置かねばならない愚に、英国の先鋭的な知識人は気付いたのだよ。その認識のおかげで、わが国は植民地化を免れたのであって、自分らの力のように錯覚するのはお笑いぐさだ。わが国の軍事力など、むこうがその気になれば、赤子の手をひねるようなものだよ」

「それでは伊藤さんは亜細亜経営の大儀名分と本音との間にいささかの隔たりもないと断言できるのか」

「おいおい、まあ、待てよ。伊藤がいわんとすることには背景があるのだ。おれたちは留学中に身にしみて体験したことがある。欧米人の有色人種への差別というやつだ。あるカトリックの神父がいったよ。植物は動物に食われるために神様がお作りになった。動物は人間に食われるために神様がお作りになった。それでな、人間は神に仕えるために作られたというのだ。そこまではよしとしても、その先だ。黒人は白人に仕えるため、つまり奴隷にするために作られたという発想が来る。一等、神に近いのが白人で、一番動物に近いのが黒人で、われわれ黄色人種はその中間とする世迷言だ。そいつで有色人種へのどのような虐待も正当化されてしまう。そうだったよな、伊藤」

「たしかに井上のいう通りのことを耳にした。それには人権思想で対抗するしかないぞ。だが、差別については、宗教上の解釈にとどまらない。そこに、わしは戦慄をおぼえるのだ。カトリックに対立する反宗教の陣営、つまり科学思想においても差別はある。維新の十年くらい前のことだが、ダーウィンという学者が進化論というのを発表してな。簡略化していうと、自然淘汰により生物が進化するという程度の理屈だが、俗流解釈すると、人間は猿から進化したというのだよ。これを人種差別にあてはめると、より猿に近いのが有色人種で進化のすすんだのが白人という説になる」

「不愉快だ」

「断じて許せん」

「差別の不当性は受ける者の側でないとわからんよ」

「昔はわれら下級武士も上級武士の横暴に泣かされたものだ」

「どうせ平等論を唱えるなら、人種差別をなくさせるほどのものでなければいかん」

「国際的な平等をいうためには、国内の不平等を一刻も早く払拭せねばならんということか」



「そういうことだ。だからこそ、アメリカの独立宣言の模倣だろうがフランスの革命思想だろうが、元はなんだってかまうものか。とにかくわれわれは紛れもない有色人種で、それによって差別をうけないためには、別の次元の差別もすべて、人権の名のもとに、否定してしまえということだ。平等論と人権論によって、世界的に人種差別撤廃の潮流を生み出していかねばなるまいよ。わしは洋行するたびに、その端緒となるべき何かを探し歩いているといって過言ではない。人でも物でも思想でもよい。西洋人が崇拝せざるを得ないような固有の何かを、われわれは探索し、育成し、突きつけねばならんのだよ」

そういう伊藤の視線が、目をうるませて懸命に聞いている可免吉を捉えた。

「わかるか、可免吉。お前もお前の立つ位置からわしに力を貸してくれ。そうだ、可免吉、お前も福澤の本が出たら、ひとつ読んでみるといい」

と、伊藤からいきなり振ってこられ、可免吉は視線の置き所に窮した。

「われわれこそ、一般に先んじて目を通す必要があるぞ」

と、井上が髭をしごいたとき、ふと可免吉の脳裡をよぎるものがあった。

「あ、あ、あの、それなら、日本橋に知り合いの本屋があるので、早めに納められないか、問い合わせてみましょうか」

「そいつは手間がはぶけていい」

「われわれが表だって注文を出しては沽券にかかわるからな」

「大量にここにもってこさせるといい」

「福澤のほうでは官憲による弾圧も想定しているようだが」

「弾圧どころか、いっそ、これみよがしに奨励してやるさ」

「これ以上、欧米諸国から因縁をつけられたくないからな」

「新政府が民衆の仇とされないよう、上手く立ち位置を調整することが肝要ということか」

「そんな小手先の話ではない。進むべき方向として正しいのだから、もっと胸を張ればよい。国民を教化する上で橋頭堡となるにちがいないのだ。上士だ下士だ百姓だ町人だという旧い差別構造が有為の人材をどれほど抹殺してきたことか。その不合理を正し、旧い壁を突き崩したからこそ、われわれは勝利を得たのだ」

「そこを大久保さんたちは理解しきれんようだから困る」

「薩摩閥との鍔迫り合いに兢々としている連中も、欧米諸国を実際にその目で見れば、己れの狭量さを悟らざるをえまい。むこうから見れば、われわれは原始の猿にすぎんよ」

と伊藤がいうのに、井上が「まあ、そう焦るな」となだめ、にぎやかな無礼講へと和んでいった。が、可免吉は思いがけずしゃしゃり出た自分の申し出が、限りない重大事としてのしかかり、いつまでも動悸が鎮まらなかった。そして、どうかして自分もこの男たちの仲間に加わり、何か手伝えないものだろうかと、そればかり考えるのであった。伊藤に対するいや増す思いこそが可免吉の重大秘密であった。

## 四　贈りもの

馴染みの魚屋がいまも越前屋に出入りしているというので、可免吉はそれとなく多加夫婦の様子を訊いてみた。すると、多加は昨夜、女の子を出産したばかりだという。それは上首尾だと、可免吉は思わず膝を打ち、早速、多加の乳の出がよくなるように、鯉を届けてほしいと魚屋に頼んだ。が、それだけでは気持ちがおさまらなかった。祝いの品を誂えるという楽しみにとらわれてしまったのだ。もしも自分に女の子がいたら、ああもしてやりたい、こうもしてやりたいという夢が可免吉には山ほどあった。それが封印を解かれて噴出した。こんなにうきうきするのは久しぶりだと思うにつけても、裏をかえせば肉親のいない淋しさがひしひしと身にしむのであった。それだけに傍から見たとき、可免吉の張り切りようは尋常ではなかった。子供はじき大きくなるものだから、かわいらしい加賀友禅の四つ身でもと思ったのだが、それに加え、すぐに着せることができる一つ身と、二通りを同

じ反物で拵えたのはまだしも、歩けるようになって初めて履く下駄から、祭用の帯にぼっくり、挙句の果ては簪まで買い漁ってしまい、祝い品一式は一反風呂敷におさまらないほどのかさばりようとなった。

それらを眺めて可免吉は改めて反省した。過ぎたるは及ばざるがごとし。これでは却って相手に疑念を生じさせてしまう。相手が裕福であればこちらが追従しているのだろうと嗤われるくらいで済むだろうが、逆の場合、相手の返礼の負担ということも考えなければならない。いずれにしても自分の想いを一方的に押しつけるようなことは慎むべきではないだろうか。少なくとも伊藤様のような方であれば、必ずそのような配慮をするに違いないと、想念はまたあらぬ方向へ逸れていく。接客商売の自分のほうがどれだけ彼から教えられたかしれやしない。しかしその伊藤も最初からそのように気の利いた男だったわけではなく、これは梅子夫人の影響によるものと、可免吉も安易に伊藤に気持ちを傾けることなどできないのだ。男は女に、女は男に磨かれるというが、その通りだとつくづく思う。伊藤のように細やかな気配りのできる人間になりたいと願えば自然、そこに節度というものが立ち上がってくる。もの哀しい情緒と共に、大人の分別を取り戻す可免吉であった。

結局、最初に発想した着物二着分だけを持参することにした。残りの品はおいおい、子供の成長にあわせて、気の張らない手土産として、ふらりと立ち寄る口実にすればよい。と、自らの興奮を抑制したのである。その着物の仕立てだが、呉服屋を通さず、直接お志乃さんに頼んだ甲斐があって、お七夜の前夜に首尾よく仕上がってきた。急ぎだったことと、細かい寸法なおしなど、後で必要が発生するかもしれないからと、身近な人に依頼したのであるが、別の理由もひそんでいた。志乃は可免吉の家の数軒先に住む一人暮らしの初老の女性であった。その昔、ご浪人となったご亭主を針仕事一本で支えてきた気丈な心の持ち主だった。芸妓たちの晴れ着だけではなく長襦袢なども安い手間賃で縫ってくれるので、皆がたいそう重宝にしていたのだが、その仕事ぶりはひと針ひと針、丁寧で心がこもっていた。それに、ちょっとでも不具合があると、快く何度でも手直ししてくれるのである。最近は歳をとって針に糸を通すのも難儀なのだが、そこはよくしたもので、近所の八重ちゃんという女の子が妙になつき、手伝っている。朝から晩まで入り浸りで、幼い頃は人形のべべづくりを志乃に習っていたのだが、いつのまにか立派な助手に成長していた。実の母娘でもこうはいくまいと思われるほど、ぴったり息があっており、常日頃、この二人にあやかりたいものと可免吉は願っていた。いつか養女を。それがこのところ膨らんでいた可免吉の夢だったからである。

その日の可免吉は、一番地味な青磁色の紗の着物に最上等の香を焚きしめ、夏ものにしては珍しい祝いの松に金銀で運気の靄を表現した軽快な帯をきゅっと締め、髪にも同じ意匠の簪を挿し、涼やかな白の礼装用の夏草履という出で立ちで、いつにない晴れやかな表情で青い空を見上げた。いざ出陣。そんな改まった気持ちになっていた。

多可はまだ産褥の床にあったが、いたって元気な様子だった。赤ん坊を覗き込むと、まだ生まれたばかりだというのに、想像を絶する色の白さで、ほんのり射した赤みがこの子の明るい未来を予感させた。見えるはずのない目をぱっちりと開いて可免吉を凝っと見つめている。抱き上げたくてうずうずする手をもてあました可免吉は持参した包みをほどき、ついでに畳紙もひろげた。多加が歓声をあげた。

「わあ、なんてきれいなの。なんて深い地色でしょう。ふつうの緑じゃないわね。少し藍を掛けてあるようね。それにくす玉のこの五色の紐の豪華なこと。こんなに刺繍が盛り上がっていると、こすれやしないかと心配になるほどだわ」

「女の子らしい赤っぽいのじゃなくて、こんな色じゃ突飛すぎるかとも思ったのだけど、あまりに珍しい貴重な風合いだったので、目が離せなくなっちゃったのよ。それに、くす玉はもともと端午のお祝いだったというから、変かなあとも思ったのだけど」



心配そうな可免吉に、床の中から半身を起こしていた多加はにぎやかに団扇を動かし、襟をちょいとつまみ上げるようにして、胸元に風を送りながら、可免吉の懸念を吹き飛ばすのだった。

「なにいってんのよ、可免ちゃん。通り一遍じゃあ、あたしが満足しないとわかっていて、特別なのを探してくれたのでしょう。可免ちゃんならではよ。他の人だとこうはいかないもの。ああ、嬉しい。どんなに御礼をいっても足りないけど、ねえ、どうしましょう」

と、ご亭主を振り返った。すると久次郎が考え深げに口を開いた。

「どうだろうねえ、この子の名前だが、ひとつ可免吉姐さんにお願いしてはと思うのだが」

可免吉にとって、雀躍りしたくなるような不意打ちであった。

「まあ、本当ですか。本当にいいのですか」

喜びを隠しきれない可免吉に、間髪を入れずに多加がいう。

「いいに決まっているじゃない。可免ちゃんみたいな美人に育ってほしいもの」

「それに、姐さんの賢さにあやかりたいのですよ」

と、久次郎もいい、座は陽気な談笑に包まれた。そのとき可免吉に、はっと閃くものがあった。

「ねえ、久次郎さん、だったらお願いがあります。この子の名前、さだということにしていただけないでしょうか」

「いいですとも。うちは女の子に春、夏、秋とつけたから、もう冬しかのこっていなくてね。この暑い最中に生まれた子に冬というわけにもいきませんから、実は大弱りだったのですよ」

という久次郎の即断によって、子どもの名前はその場でさだと決まった。お七夜の祝いとして、書を飾りたいと多加がいうので、たっぷりと墨をふくませた太筆で、「さだ」と書かせてもらったのだが、可免吉の手はふるえがちであった。

こんな仕合わせなことがあってもいいのだろうか。可免吉は頬をつねりたいほどであった。そもそも貞というのは、六歳で早逝した伊藤博文夫妻の子どもの名前であった。あの時の伊藤の嘆きようが可免吉の目に焼き付いている。多加ちゃんの産んだあの子はきっと、伊藤様のところのあのお嬢ちゃんの生まれ変わりにちがいない。不動尊信仰の厚い可免吉はそれを天の啓示と受け取った。この世で報われない思いの結晶というべきか。あの子はきっと、むこうの世で、伊藤様とわたしの魂がまぐわって、この世に送られることになったのだわ。そうよ。わたしたちの子ですとも。そう思うと、新たないとしさがこみあげてきて、温かい涙の粒がじんわりと目頭に盛り上がるのだった。

その年の暮れはいつになく暇であった。伊藤たち新政府要人がごっそり海外に出てしまい、さすがの可免吉もお茶をひくことが多くなっていた。そんなある日、可免吉は思わぬ麗人の訪問を受けた。伊藤博文の令夫人、梅子であった。梅子は単刀直入に用件を切り出した。

「岩倉使節団出発の直前、井上馨様とわたしたち夫婦、それに横浜のお倉さんの四人で、ある話し合いをしました。そこであなたに白羽の矢が立ったのです。可免吉さん、あなた、そろそろ本格的な置屋を始めませんか。必要な資金はわたしが融通します。そうする必要があってのことですから遠慮は要りません。わたしがあなたの名義をお借りして、いざというとき伊藤を匿うための別邸を設け、あなたに管理をゆだねるのだと解釈していただけば話が早いでしょう。でも、このことは一切他言無用です。あくまでもあなた一人の苦労によるものだと、世間に認めてもらう必要があります。こちらからのお願いは二つです。誰にも見咎められないで出入りできる秘密の隠れ家を兼ねること。もうひとつは、国際的な社交場で活躍できるような品のある女性を育成する場として活用できること。この二つが条件です。表の看板はあくまでも一般的な芸者の置屋ですから、伊藤が日本を留守にしているうちに、基盤を固めておいてほしいのです」

危険を伴う密命であった。が、可免吉の心は既に決まっていた。梅子夫人と共に整えたその家に、ひょっとすると、多加の産んだ娘さだを迎えることになるのではと、頻りにそんな運命を予感していた。

（続）

## 貞奴フォーラムとは

「貞奴フォーラム」は、貞奴とその時代、関連する出来事や人物に興味をもつすべての方々の情報交換を目的とした団体です。趣旨に賛同していただける方であれば、どなたでも参加できます。

貞奴に関する主要文献の輪読・合評、関連事項の調査・研究、関係諸団体との交流や関連施設の見学会などを行っています。

月例会は通常、貞奴の祥月命日である七日に開催されますが、変更することもあります。貞照寺ご本堂の参詣に始まり、貞奴の眠るご霊廟周辺を清掃し、霊前でお祈りをあげた後に、庫裏の一室をお借りして勉強会を行っています。

## 貞奴フォーラムの歩み

※毎月七日の月例会を除く

二〇一一年一月十四日　結成
二〇一一年四月二五日　第一回シンポジウム(貞照寺にて)
二〇一三年一月　一日　機関誌「香葉」創刊
二〇一三年十月二七日　第二回シンポジウム
　　貞奴写真展(喜川閣にて)
二〇一三年十月二八日　ユネスコクラブ日本ライン設立総会
　　設立メンバーとしてその構成団体登録
　　記念茶会(萬松園にて)
二〇一四年　四月　福澤桃介が建設した七つの発電所見学会
　　六月　長野県南木曽町にて第一回「水灯祭」
　　貞奴に関する講演・朗読劇・歌
　　八月　ユネスコ世界大会関連　講演会
　　九月　貞奴写真展　銀行ロビー巡回開始
　　十月　ユネスコ世界大会参加
　　十一月　日本ユネスコ連盟理事長来訪
　　萬松園にてウェルカム茶会
二〇一五年　一月　岐阜県博物館「福澤諭吉展」に協賛し
　　桃介・貞奴展　リーフレット配布
　　八月　長野県上松町にて第二回「水灯祭」
　　福澤桃介に関する講演とシンポジウム
　　桃介・貞奴に関する寸劇

## 編集後記

本号の発行が遅れましたことについて、まずはお詫びを申し上げます。在野研究にありがちな制約のひとつに資金難ということがあります。本号は川上別荘萬松園オーナーであり、そこを運営している株式会社創寫館の会長、森田満夫氏から格別のご支援をいただき、ようやく発行の運びとなりました。心より御礼を申し上げます。

二〇一三年初頭の創刊から二年十ケ月。この間、講演、執筆、展示など、貞奴の真実の姿を少しでも世に知らしめたいと、活動して参りましたが、内容的には同語反復の足踏みであったような気がしてなりません。

唯一、特筆すべきはユネスコのＥＳＤ世界大会への参加でした。貞奴をユネスコ未来遺産として位置づけ、文化・芸術・学術を通じての平和を謳う高邁なユネスコの理念にシンクロさせ、民族の多様性の発露、国際理解の実践例として、貞奴の足跡を紹介するという新機軸を得ました。

それらの過程において、少なからぬ論考を蓄えながら、二号発行の時期を待つうちに風化を免れず、断腸の思いでそれらを没とし、新たに書き下ろした未成熟なものを積み込んでの二号船出となりました。大きく迂回したために積み残したものの中にはペーター・パンツァー博士の著書の翻訳なども含まれます。大阪府立大学名誉教授山本博志先生にせっかくご協力をいただきましたのに、その成果を公開できず、慙愧に堪えません。

他方、巻末のフィクションは、まったくの蛇足との非難を免れないかもしれません。冒険を承知で敢えて掲載に踏み切った理由は、ご一読いただいた折、自ずと明らかになろうかと存じます。

「香葉」編集長　藤本尚子



執筆者

江尻勝典
仲谷甚作
西田　壽
藤本尚子
槙野孝子
森田節子

写真提供

故 川上　初　様
株式会社 創寫舘　様
名古屋市 文化のみち 二葉館　様
関西電力 株式会社　様

協賛　迎賓館サクラヒルズ川上別荘
　　ユネスコクラブ日本ライン

香葉　第二号
二〇一五年十月一日発行
監　修　藤本尚子
発行者　貞奴フォーラム
（本部）岐阜県各務原市
鵜沼宝積寺町
貞照寺内
印刷所　山興印刷株式会社
岐阜県各務原市
蘇原野口町三丁目五
定価一〇〇〇円

各務原市図書館
113433924